宗教法人　東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

イスラーム Q＆A

◎――――目次

信仰について

清潔さについて

崇拝行為について

ハラールとハラームについて

家庭生活について

政治活動について

商道徳について

社会生活について

道徳について

信仰について

Q1 イスラームの信仰の基本とは何ですか

A 　イスラームでは、信仰とは「アッラー以外に神は存在せず、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのしもべであり、使徒であると信じること」という言葉に要約できます。クルアーンのさまざまな言葉にもとづくイスラームの信仰の基本は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によって次のように列挙されています。アッラーへの信仰、天使たちへの信仰、啓典への信仰、預言者たちへの信仰、来世への信仰、カダーとカダルへの信仰です。

アッラーへの信仰

　アッラーへの信仰は、アッラーを、ご自身がクルアーンで語られている特性とともに信じることです。アッラーは唯一であられ、知と力、意志の持ち主であられます。アッラーに並び得るものは何もなく、比類なきお方です。崇拝するにふさわしいお方は、ただアッラーのみです。存在する全てのものはそのお方の作品です。存在する全てのものは、その存在、唯一性、そしてその特性の論拠です。クルアーンの純正章では、たいへん意味深い形で次のように語られています。

「言え、『彼はアッラー、唯一なるお方であられる。アッラーは、自存され、お産みなさらないし、お産れになられたのではない、彼に比べ得る何ものもない』」

　この章で語られているように、産むこと、産まれることはアッラーではなく、人間の特性です。

　イスラームでは、「アッラー」とは神の固有の名称です。神とは完全なる存在です。それゆえに完全ではない存在は神ではあり得ません。例えば、神は唯一であるべきです。もし神が複数であれば、それらは決して神ではあり得ません。また神は無から有を生む創造者でなければなりません。創造することができない存在は神ではあり得ず、何らかの不足を持っている性質はけっして神には当てはまらないのです。

天使たちへの信仰

　イスラームの教えでは、被造物の世界とは単に目に見えるもののみで成り立っているのではありません。私たちの生物的・物理的な能力が限られたものであるゆえに見

えない世界があるのであり、それはそれらが存在していないことを意味しているのではありません。私たちはこれらの被造物について多くの知識を持っているわけではなく、クルアーンの説くところによれば、天使は常にアッラーを崇拝し、アッラーが命じられたことに従い、決して反抗することのない存在です（禁止章第6節、蜜蜂章第50節）。天使には男女の別はありません。食べたり飲んだりすることはなく、その創造により彼らは特有の資質を持っています。また彼らは人間の形をとることができ（マリヤム章第16－17節、フード章第69－73節）、さらに天使たちはアッラーに背くことがないゆえ、その命令に背くこともありません。多くの役割を果たす天使たちの数を私たちは知ることができませんが、ジブラーイール、ミカーイル、イスラーフィール、そしてアズラーイールの四大天使には重要な役割が与えられています。

啓典への信仰

　アッラーは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通して啓典を下されたように、最初の人間であり預言者でもあるアーダム以降、多くの預言者たちにさまざまな啓典を下されました。イスラームの信仰においては、これらの啓典も信じなければなりません。これらの啓典の本来の姿は、皆クルアーンのように神聖です。しかしこれらの啓典は、のちに変更や改ざんが加えられ本来の内容を保っていないのです（婦人章第46節、食卓章第13・41節）。

預言者たちへの信仰

　前項で述べたように、アッラーはただ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のみに啓示を下されたのではありません。それぞれの民に、ご自身のお言葉を伝えるために預言者を遣わされ、人々を正しい道へと導く役目を与えられました（雷電章第7節）。したがって預言者ヌーフ、イブラーヒーム、ユースフ、ムーサー、ダーウード、イーサー、そしてその他の預言者たちも、預言者として信じなければならないのです。そしてクルアーンで告げられている通り、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は最後の預言者なのです。彼以降に預言者は遣わされていません（部族連合章第40節）。預言者たちは啓示を授かったとはいえ一般の人々と同様に一人の人間です。しかし宗教的な生き方においては模範とされるべき人々なのです。

来世を信じること

　私たちは、いつかこの世界が終焉のときを迎え、死後、人は復活させられ信仰や行いについて問われること、そして善行を積んだ者は天国へ、悪事を重ねた者は地獄へ送られることを信じています。

　いつ、この世が終わるかについてはアッラーのみがご存じです。このときについては、クルアーンで次のように述べられています。

「彼らはそのときに就いて、あなたに問う。『それが到来するのは、何時（の日）で

すか』あなたは、何によってそれを告げられようか。その終末（の知識）は、あなたの主にあるだけ」（引き離す者章第 42 － 44 節）。

世界の終焉については、また次のように語られています。「大地が激しく揺れ、大地がその重荷を投げ出し、『彼（大地）に何事が起ったのか』と人が問うとき。その日（大地は）すべての消息を語ろう。あなたの主が啓示されたことを」（地震章第 1 － 5 節）。

すべての人間がその行いについて問われた後、不信心者が地獄に追いやられるさまは次のように語られています。

「不信者は集団をなして地獄に駆られ、到着すると地獄の諸門が開かれる。そして門番が問う。『あなたがたの間から出た使徒は来なかったのですか。（そして）主からのしるしをあなたがたのために読誦し、またあなたがたのこの会見の日のことを警告しなかったのですか』。彼らは（答えて）言う。『その通りです。そして不信者に対する懲罰の言葉が、真に証明されました』。（彼らは）『あなたがたは地獄の門に入れ。その中で永遠に住みなさい』と言われよう。何と哀れなことよ、高慢な者の住まいとは」（集団章第 71 － 72 節）。

信者が天国に入る様子は、次のように語られています。

「また彼らの主を畏れたものは、集団をなして楽園に駆られる。彼らがそこに到着したとき、楽園の諸門は開かれる。そしてその門番は、『あなたがたに平安あれ、あなたがたは立派であった。ここに御入りなさい。永遠の住まいです』と言う。彼らは（感謝して）言う。『アッラーに讃えあれ。彼はわたしたちへの約束を果たし、わたしたちに大地を継がせ、この楽園の中で好きな処に住まわせて下さいます』。何と結構なことよ、（善）行に勤しんだ者への報奨は」（集団章第 73 － 74 節）。

カダーとカダルへの信仰

カダルは、崇高なるアッラーが全てを一定の基準に基づいて定められていることを意味しています。カダーは、アッラーが意図され、定められたことがそのときが来ると実現したり、創造されることです。当然この創造は何の理由がないものではなく、何らかの英知によるものです。しかし人々は、出来事をその全体像でとらえることができないため、何が自分にとって良いことか悪いことかをすぐに把握できません。実現した、あるいは実現するであろう全てのことは、アッラーの知識とお許し、創造にかかっているのです。人間はそれを前提に、自らの意志によって自分の行為を選択する権利を持っています。このように、人間が正しく選択できるようにアッラーから啓示が下されているのです。

Q2 アッラーの存在とその唯一性について教えてください

A　啓示宗教の基本的概念の核心は、世界を創造し、英知、力、意志といった特性の持ち主であり、絶対的な存在であるアッラーにあります。全世界とそこに存在する全てのものはアッラーが創造されたのです（識別章第 59 節）。その創造においてはアッラーへの助力者はなく、アッラーと同位であるものは何も存在しません。創造されるときも一切の媒介を用いられません（洞窟章第 51 節）。イスラームの信仰においてアッラーとはどのような存在であるかを理解するためには、「タウヒード」の信条を理解する必要があります。「タウヒード」は、信仰の基本として、絶対的な意味でアッラーの唯一性を信じることです。クルアーンは「あなた方の神は唯一の神である」（雌牛章第 163 節、食卓章第 73 節、家畜章第 19 節）、「彼はアッラー、唯一なる御方であられる」（純正章第 1 節）とタウヒードについて述べられています。

イスラームの教えの基本は、タウヒードの信条から成り立っています。用語としての「タウヒード」は、創造者と被造物の間の境界を認識することと定義されています。この観点からタウヒードは、アッラーのあられ方、特性、なされることにおいての唯一性を、そして崇拝するに値する唯一の存在であられることを知るということを含んでいます。アッラーは創造され、導かれ、教えられ、守られ、生命を取り上げられ、復活させられ、糧を与えられ、ドゥアー（祈願）を受け入れられ、ハラール（許されていること）とハラーム（禁止されていること）の判断を下され、ただその御方のみに崇拝行為がなされ、全てを統治される御方なのです。この意味で信者は、アッラーが天と地とその間に存在する全てのものを導かれる御方であることを信じ、アッラーに何かを同等に配することはありません（詩人たち章第 24 節、蜜蜂章第 116 節、悔悟章第 30 － 31 節、集団章第 3 節）。イスラームの信条において、これは全てを導かれ統治される御方であられるという意味においてタウヒードと呼ばれます。

アッラーは、統治される御方として唯一の存在であられるのと同様に、神としても唯一であられます。なぜなら神は、信仰と崇拝行為の対象であり、深い敬意を持たれ、何よりも愛され、人がしもべとして仕える唯一の存在であられるからです。これら全ての特徴を持たれているのはただアッラーだけです。イスラームの信条において、これは神であられるという点におけるタウヒードと呼ばれます。イスラームの信条の真髄を形成する、唯一性を宣言する言葉（カリマ・タウヒード）は、アッラー以外のどの被造物も神であることは考えられないことを指摘するものです（ユーヌス章第 18

節、ユースフ章第 40 節)。
イスラームの信仰においてはアッラーの美名と特性もまたタウヒードを表しています。アッラーの美名や特性が、被造物のものとは存在論的な意味で全く等しくないことを受け入れることです。同様に、その行いにおけるタウヒードの信条とは、アッラーが全てを創造された唯一の行為者であられ、その行いの全てを単独で実現されたことを示すものです。この意味でアッラーは唯一の創造主、管理し統治される御方なのです(ヤー・スィーン章第 82 節、高壁章第 54 節)。
人は誰でも、精神的に高まることを望めば、聖職者や偶像など何の媒介を必要とすることなく、直接その心と知性、そして全ての自我をアッラーに開くことができます(集団章第 43 − 44 節)。クルアーンはアッラーがたいへん慈悲深く慈愛にあふれた御方であること、そして人はアッラーとの間に誰をも介在させることなく、悔悟を行い、アッラーに許しを乞うことによって罪が清められると述べています。アッラーの慈悲は全てを包括するものなのです(高壁章第 156 節)。クルアーンの伝えるアッラーは、絶対的な公正さと比類なき慈悲の持ち主であられるのです。

Q3 なぜアッラーを見ることができないのですか

A 視覚は、可視光線の与えるシグナルを受け取ることで可能となる感覚プロセスです。このプロセスは感覚器官の一つである目によって実現されます。ある存在を見るには、健康な視覚の器官を持っていると同時に、その存在が一定の波長を持ち、可視光線を発していることが不可欠です。これらの条件のどれかが欠けていると、このプロセスは実現しません。しかしそれは、その存在がないということを意味するものではないのです。
例えば、これまでの研究により人の目は物理的な世界における光の 2.5 パーセントしか見ることができないとされています。そもそも人類は世界の果てがどこにあるかをも知ることができません。したがって、最も精巧な機器の力を借りたとしても把握することのできないところで、あるいは次元で、他の被造物が存在しないと主張できるだけの具体的な根拠を持っていません。
何らかの存在を認めるためには、それが五感で感じられるものである必要はないのです。例えば、電線の中を通る電流それ自体を目で見ることはできません。それを写真に撮ったり、「電気とはこれである」と示したりすることはできません。しかし、電気の存在やその作用、影響力などを私たちは知っています。したがって私たちが

神を認めるために、そのあり方を具体的に見せ示すことは必要ではありません。電気と同様に神の存在もまた、その技や行いから知ることができます。「神そのものをなぜ見ることができないのですか」という問いは、「電気そのものをなぜ見ることができないのですか」という問いに似ています。
神は、創造されたどのようなものにも似ておられず(そうでなければ、神とその他の存在の違いがなくなってしまいます)、存在論的に最高の段階に位置しています。それゆえアッラーを視覚によって捉え、認識することは不可能なのです。私たちは存在論的により下位に位置する電気すら見ることができないのに、どうして最も高い段階に位置する神を見ることができるのでしょうか。
崇高なるアッラーがクルアーンでご自身について語られているように、アッラーには同じ位置に存在するものも、類似する存在も、あるいはその対極に位置する存在もありません。アッラーは創造主であられ、被造物ではありません。形を与える御方であられますが、形を持つ御方ではありません。全ての空間を統治される御方ですが、アッラーはどこかの空間に位置されるという段階よりもより崇高であられます。そのため、アッラーを見ることは不可能なのです。言い換えれば、もしこの世界で目に見えるものであれば、それは神ではあり得ないのです。もし神がはっきりと目に見える存在であるとするなら、皆義務としてその存在を受け入れ、その偉大さに頭を垂れていたことでしょう。その場合は、私たちが物事を自由に判断するために与えられた理性を持っている意味がなくなってしまいます。事実、アッラーはクルアーンで次のように語っておられます。
「それがアッラー、あなたがたの主である。彼の外に神はないのである。すべてのものの創造者である。だから彼に仕えなさい。彼はすべてのことを管理なされる。視覚では彼を捉えることはできない。だが彼は視覚そのものさえ捉える。また彼はすべてのことを熟知され、配慮されておられる」(家畜章第 102 − 103 節)。
アッラーは目に見える御方ではない一方で、その存在、唯一性、崇高さを示すものとして、この世界に多くのものを創造されました。クルアーンにはこれらを、私たちがアッラーに到達する論拠として示されています。「われは、わがしるしが真理であることが、彼らに明白になるまで、(遠い)空の彼方において、また彼ら自身の中において(示す)。本当にあなたがたの主は、すべてのことの立証者であられる。そのことだけでも十分ではないか」(フッスィラ章第 53 節)。「天と地の間には、(アッラーの唯一性や神慮に関し)如何にも多くのしるしがある。彼らはその側を過ぎるのだが、それらから(顔を)背ける」(ユースフ章第 105 節)。
一方で、クルアーンが伝えるところによると、信者は来世において、(今はまだどのような形であるか私たちの知り得ない方法で)アッラーを拝見することができるの

です（復活章第 20 － 23 節）。

Q4 信仰と知識の間にはどのような違いがありますか

A 信仰は、信条によって始まり、知識によって継続する努力が、承認と意志決定の段階に到達することで成立します。信仰は独断的な承認ではなく、理性と意志の相互の調和であり、知識を元にした承認によって成り立つ受け入れです。真の意味での信仰は、知識を得て思索をめぐらせた上で承認するといったプロセスを経て成立します。何かを認め、それを真実であるとすることを意味する承認は、知識なしでは行うことはできません。真実であると認められている事柄について、知識なしでそれを承認することが不可能であるように、信仰においても、信じるべき事柄について知識を持つことなくそれを承認することは不可能です。クルアーンでも、「だから知れ。アッラーの外に神はないことを」（ムハンマド章第 19 節）と命じられ、まず知識を得、それから信仰の段階に至っています。この意味は、信仰とは心の知識である、というものではありません。承認と知識は双方とも心と知性の活動ですが、その間には違いがあります。承認は心において、人の努力や自由意志によって生じるものであり、知識は特別な努力や自由意志がなくても存在し得ます。さまざまな理由で心に生じる抽象的な事柄は、信仰とはいいません。それが信仰といわれるためには、知識よりも、意識的な服従、帰依が存在することが必要です。信仰が熟考を元にした知識に支えられることと、直接知識が信仰となることとは別物です。信仰が揺らがないよう、それは必ず知識によって支えられるべきです。これを、探求に支えられた信仰といいます。

この意味で信仰とは知識をも包括するより広い概念です。全ての信仰は同時に知識をも含むものですが、知識は信仰ではないのです。何かを知り学ぶことは、それを信じ、受け入れることを意味していないのです。しかし信じたことは全て、受け入れ、認めたことになります。一例を示せば、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）について書かれた本を読んで学ぶことが知識です。彼がアッラーによって遣わされた預言者であることを認めない限りは、この知識は信仰には至りません。信仰を信仰たらしめるものは、承認し従うことです。

また一方で、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）について正しい知識を持たないまま彼を預言者と認めることも浅い信仰です。真の信仰は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）について正しく十分な知識を得て、彼がアッラーによって遣わされ任命された使徒であることを受け入れることです。このことから知識を伴わない信仰は浅く、表面的なものであるということができます。だから信仰箇条について十分な知識を持ち、それらを受け入れて信仰に変えていくことが必要です。

Q5 クルアーンとはどのような書物ですか。他の啓典との違いはありますか

A 崇高なるクルアーンは、アッラーから預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に啓示されたときのままの形で書記たちによって書き取られ、今日までその形が維持されてきた神聖な書です。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人間に遣わされた最後の使徒であり、崇高なるクルアーンは、彼を通して人類に送られた最後の神聖な呼びかけです。

啓示されたときのままの形で、一切変更されることなく現在まで伝えられているということは、クルアーンにおいてのみ実現していることであり、他の啓典においては実現していません。ユダヤ教の律法が現在の形となったのは預言者ムーサーの時代よりも 13 世紀後の西暦 1 世紀になってからのことです。このため律法の文書の成立、預言者ムーサー以降の状況、現存する律法の複写がどの時期に、誰によってなされたかという点は、学問的に論争されています。このことは、律法に関連する諸宗教の歴史学者たちが認めているところです。また現存する新約聖書が預言者イーサーによって書かれたものでないことは、キリスト教徒によっても認められています。その記述は預言者イーサーよりも少なくとも 30 年後に始まり、西暦 1 世紀の終わり頃完了したとされています。

崇高なるクルアーンは、最初の人間である預言者アーダム以来、全ての預言者によって伝えられてきた聖なる最後の啓典です。それ以前の聖典が含んでいた基本的な原則もそこに含まれています。クルアーンは、イスラーム以前に下された啓典も神によるものでることを認めています。ただしクルアーンは、イスラーム以前の聖典の正誤の識別の基準を示し、ユダヤ教徒やキリスト教徒の信条的、道徳的な逸脱を指摘しています（婦人章第 159 － 161 節、食卓章第 72 － 73 節）。論争している項目についても言及し（蟻章第 76 節）、また律法の本来の姿が維持されていないことも示しています（雌牛章第 75 節、婦人章第 46 節）。

クルアーンの章の名前の一つは「識別」です。この名称は、正誤、正邪、美醜をそれぞれ区別する価値観を教えていることに由来します。クルアーンは、それ自体の表現を用いるなら、「いやし」と「慈悲」の源泉です。そして「光」によって人々を

闇から光へと導く（雌牛章第 257 節）、現世と来世における幸福の唯一の媒介なのです（食卓章第 16 節）。

クルアーンはそのメッセージにより、被造物の主について、生と死や死後を人々に教えています。そうすることによって、不安や精神的な混乱から人々を救います。裏表のある振る舞いや妬み、憎悪や敵意といった感情から自らを清めます。またクルアーンに示されている豊かな生き方の規範により、信仰する人々はこの世の狭小な世界から救われ、平安と幸福の家である天国の、無限の地平に導かれるのです（ユーヌス章第 25 節）。

崇高なるクルアーンの根本的かつ重要な教えの筆頭に、タウヒード（神の唯一性）が挙げられます。現在、世界に存在する啓典のうち、この信条を最も明白に示しているのがイスラームの教えです。それは偶像崇拝が広く行われ、タウヒードの信条が多神教と混在しているという状況下で下されました。そして、アッラーのみが神であるという原則をもたらしたのです。このようにして、創造主と被造物の違いが明白な形で区別されたのです。クルアーンには、アッラーに同位者はなく比類なき御方であることが、他の啓典には見られない形で宣言されているのです。

クルアーンがもたらした基本原則のもう一つのものが来世への信仰です。この信仰は、現世での生が終わったあとから始まり永遠に続く 2 番目の生です。来世で人は現世で行ったことの対価を得ます。それは神の公正が絶対的な意味で実現するのです。現世で良い行いをした信者にとって、来世は無限の幸福、平安の家となります。悪事を働いてきた人間にとっては、その行いの罰を受ける場となるのです。クルアーン以前の啓典においても、来世への信仰については言及されています。しかしクルアーンほど明白に、印象的な形では表現されていません。来世への信仰は、信者の信条と宗教的実践を伴う生き方の、まさに中心に位置しているのです。

クルアーンを否定する人々は、歴史を通して今日まで、クルアーンに匹敵するものを示すことができずにいます。表現や様式を含め、クルアーンは人々を驚愕させるほどの内容をもっています。まさしくそれは一つの奇蹟です。イスラーム以前の預言者たちの奇蹟は、それぞれの時代においてのみ有効でした。だがクルアーンの奇跡は最後の審判の日まで続くものです。

崇高なるクルアーンはそこのことを、次のように述べています。

「もしあなたがたが、わがしもべ（ムハンマド - 彼の上に平安あれ）に下した啓示を疑うならば、それに類する 1 章〔スーラ〕でも作ってみなさい。もしあなたがたが正しければ、アッラー以外のあなたがたの証人を呼んでみなさい。もしあなたがたが出来ないならば、いや、出来るはずもないのだが、それならば、人間と石を燃料とする地獄の業火を恐れなさい。それは不信心者のために用意されている」（雌牛章第 23 － 24 節、フード章第 13 節、山章第 33 － 34 節）。

崇高なるクルアーンは、ただ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代だけのものではなく、その存在と導きは、世界が存在し続ける限り続く、時代を超えた書物なのです。そこには、どの時代においても普遍的な信仰、崇拝行為や社会生活に関しての基本原則が含まれています。アラブ社会のみならず全ての人々に普遍的な書物なのです。命令と禁止事項、規範と奨励、忠告と原則、吉報と警告、アッラーが人間やその他の被造物について知らされた真実、知識、定義は時間の経過とともに変化することなく、その価値はけっして損なわれることはありません（洞窟章第 27 節、家畜章第 115 節）。

崇高なるクルアーンのもたらしたメッセージの、さらなる特徴は次の通りです。クルアーンは血統や血筋、民族もしくは文化的な環境に関わりなく、全ての人類に呼びかけているものです。その意味で普遍性を持っているのです。人の価値は生まれながら、あるいはのちに獲得された世俗的な身分や階級によって決まるものではありません。それは崇高なるアッラーとの結びつきと、アッラーの道において努力をし、アッラーのご満悦を得ることによって自らの価値を高めていかなければならないのです。

Q6 クルアーンを読んだときにわからない部分があります。どうすればいいのでしょうか

A クルアーンは、最初の人間であり預言者であるアーダム以来、歴史上のさまざまな時代に生きた預言者たちの努力、またその民の預言者への呼びかけに対する反応についても言及しています。またクルアーンは、ヒジャーズ地方のアラブ人の信仰、崇拝行為、道徳、そして社会生活についても触れています。彼らの誤った風俗、習慣を否定し、それに代わってどのような時代においても適応され得る基本的な原則を示しています。

クルアーンは、歴史に関する事柄についても簡潔な言葉で言及しています。ときには一つか二つの言葉で、ヒジャーズ地方のアラブ人、あるいはイスラーム以前の預言者たちが呼びかけた民の暮らしや重要な出来事を示唆しています。クルアーンがそれらの全てを詳細に語ることはそもそも不可能です。そうでなければそれは神の書ではなく宗教史百科のようなものとなっていたでしょう。さらには、翻訳をもとにクルアーンを学ぼうとすることは、読者を誤った結果に導くこともあり得ます。なぜならその場合、クルアーンの簡潔な表現について言語学や歴史学の観点から掘り下げ、研究していくことが必要となるからです。そのために、クルアーンを読むときには脚

注が付いているクルアーンの訳、もしくはその必要に応じてさまざま解釈を示す文献を参照しなければなりません。そもそも解釈が書かれた意図も、このようなクルアーン理解の困難さを乗り越える上で読み手の助けとなることにあります。

また崇高なるクルアーンには、それ自体の様式や事柄へのアプローチ方法があります。例えばクルアーンでは、信仰、崇拝行為、道徳、信条、預言者、最後の審判、天国、地獄、タウヒード（神の唯一性）、シルク（アッラーに何ものかを配すること）といったことが、項目別に独立した形で言及されてはいないのです。こういった項目は、さまざまな章やページで異なった形で言及されています。それらの項目に何度も何度も読み手の注意を引きつけ、警告や忠言を与えるという形をとっているのです。こうした形式は、現代の読み手はあまりなじんでいません。そこで何らかの項目について、関連するクルアーンの言葉の全てを、一つの集合体としてまとめている「テーマ別の解釈」を活用することです。

イスラームの教えの根本的な源であるクルアーンは、読まれ、理解され、生きていく上での規範として生活に反映されるために啓示されました。この読み、理解するという過程は、一定の手段をもって行われるべきです。その手段が理解されなければ、目的に達することはないでしょう。多くの人は、崇拝行為や道徳に関するクルアーンの言葉の意味は理解できるでしょう。しかし崇拝行為の実行に関する事柄や、社会生活に関連する一部の言葉の解釈は、特別な専門知識を必要とします。

したがって、クルアーンを理解するために努力しなければなりません。もしクルアーンの訳を読んで、理解できない章句があれば、別の訳を読んで参考にすることもできます。あるいは外国語のクルアーンを参照することもできます。信頼できる知識を持った人が勧める、クルアーンを解釈している文献を参考にすることもできます。あるいはその章句が啓示された理由に関する伝承を読むことができます。また、そのときには理解できなかった章句が、別の章でより理解しやすい形で述べられているかもしれません。だから、理解できなかったといって読むことを放棄するのではなく、読み続けることが大事です。

さらに、クルアーンを理解する上で、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のハディース（言行録）も参考になることを忘れてはいけません。スンナ（慣行）は、クルアーンの秘められた表現を説き明かしてくれます。この例として、礼拝やザカート（喜捨）、巡礼などを挙げることができます。私たちは礼拝をどのように行えばいいかを、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の解説と実践から学ぶことができます。またハラール（許されていること）とハラーム（禁止されていること）のように日々の生活に関する多くの事柄で、私たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の説き明かしを必要としているのです（高壁章第157節）。

Q7 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はどのような人だったのでしょうか

A 全ての預言者と同様に、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も人間の中から選ばれています。クルアーンは、彼が天使の預言者ではなく人間の預言者であると強調しています（夜の旅章第93・95節）。彼はマッカで生まれ、子ども時代を孤児として過ごし、青年時代には交易で生計を立てていました。たいへん質素に暮らされ、自然で謙虚な生き方をされ、他の人々と同様に結婚され、子どもたちにも恵まれていました。40歳までは、預言者あるいは指導者としての主張をしたことはなく、また詩人や勇者、族長もしくは金持ちでもありませんでした。彼は預言者としての活動を始める前も始めてからも、世俗的なもの、ぜいたくや権力などを求めることは一切ありませんでした。預言者としての活動を始め、マディーナで築いた共同体の指導者となった後、つまり多くの力を得た後でも、非常に質実な生き方を選んでいたのです。

彼は預言者となる以前には、周囲の人々から「アミーン」、すなわち「信頼できる人」と呼ばれていました。預言者となってからは、妻アーイシャの言葉を借りるなら、「その御方の徳はクルアーンそのものであった」のです。クルアーンの中に示されている誠実さ、忠義さ、自己犠牲、無私無欲の献身、信頼、優れた能力、正義、公正さといった多くの徳の持ち主であられたのです。クルアーンが示している徳を身につけ実践され、イスラーム共同体の模範となられたのです。周囲の人々に対して、常に親切、丁寧で、上品で理解ある態度をとられ、うぬぼれ、高慢さ、執念深さ、偽善、憎悪、背信、不正、偽りといった悪い行いからは遠ざかっておられたのです。こうした資質から、預言者はアッラーによって人間に遣わされた最良の模範と見なされたのです（部族連合章第21節）。

また預言者であることから、優れた知能、知性、記憶力、そして預言者特有の判断力を持っておられました。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーからもたらされた全ての啓示をそのまま人々に伝えられ、必要とあればその内容を分かりやすく解説されました。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の最も本質的な特性の一つは、慈悲の使徒であられたということです。クルアーンでは「われはただ万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである」（預言者章第107節）と述べられています。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、生涯を通して、一切の暴力と無縁の人でした。マッカで預言者としての活動を始めたとき、彼自身やイスラームに入信し

た人々に対して加えられた度重なる迫害や弾圧にもかかわらず、暴力で対抗したり誰かを煽動したりすることはけっしてありませんでした。ひたすら耐え忍ばれたのです。その忍耐も限界に近づいたとき、信者たちを暴力にではなくマッカからマディーナへの移住へと向かわせたのです。そしてやむをえずアッラーの許しを得て、戦いにのぞむこととなったのです（巡礼章第39節）。慈悲の使徒は、戦いをせざるをえなくなったときでも子どもや女性、老人の殺害や復讐のために敵の死体を傷つけることを禁じられました。マッカを征服した際には、報復を禁じ、敵対していたマッカの人々を許されたのでした。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の最も本質的な特性は、彼が「最後の預言者」であられるということです（部族連合章第40節）。神は、彼を最後の預言者として選ばれました。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が遣わされたことで預言者たちの鎖は最後の輪に至り、完成したのです。最後の審判の日まで、もはやアッラーは新たな預言者を遣わされることはないのです。

Q8 クルアーンと預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のハディース（言行録）はどこが違うのでしょうか

A イスラームの聖典クルアーンは、アッラーからジブラーイールという大天使を通して預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に下された、言葉や文章のそれぞれが「啓示」である神聖な書です。その啓示は、マッカとマディーナで23年という歳月をかけて下されました。イスラーム教徒にとってクルアーンに含まれる全ての言葉がアッラーからのものであり、不変であることは疑いのないことです。いくつかの言葉の読み方に多少の違いがあるものの、この14世紀の間を通してイスラームの全地域においてクルアーンは同一です。ただ、いくつかの章句については、それがどういう意味になるか、それをどのように解釈すべきかという点で、異なる解釈やアプローチが存在します。信仰、崇拝行為、道徳から社会的な人間関係まで、現世から来世のことまで、多くの異なる項目を含むクルアーンの章句は、イスラーム教徒にとって最も重要な崇拝行為である礼拝でも唱えられます。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のハディース（言行録）は、さまざまな機会に預言者が語られた言葉、行われたことをまとめたものです。これらの言葉のいくつかは、クルアーンの啓示からのものであり、他は彼が人間である以上、完全に人間によるものとなっています。クルアーンの言葉とは逆に、ハディースが不変のものであるか、あるいは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に属するものであるかといった点については、教友たちの時代から現在に至るまで論じられてきました。さまざまな議論を経たのち、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のものであるという結論が出され、学者たちによって承認され、人々の行動の手本となってきました。しかし結局のところこれらの言葉は、クルアーンの言葉ほどに絶対的で普遍的なものとは見なされていません。なぜならハディースは、それらを見聞きした教友たちにより、異なる内容や、異なる意味で伝承されてきたからです。ハディースはヒジュラ暦（聖遷の行われた西暦622年を元年とする）2・3世紀に、偉大なハディース学者たちによってさまざまな方法でまとめられ、編纂されました。ハディースは信頼でき、不変のものであったとしても、クルアーンの章句のように礼拝では唱えられません。

Q9 イスラームという宗教とキリスト教の違いはどこにありますか

A 啓示宗教の信仰、崇拝行為、そして道徳の基本は本来同一だと思いますが、時間とともにそれらは変化し、本来の形を失ってきました。それゆえ、基本的に啓示宗教は共通項において一致していますが、キリスト教と最後の啓示宗教であるイスラームとの間には違いが生じています。

両者の成立過程は対照的で、イスラームの教えはクルアーンの導きによって、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代にそのスンナ（慣行）も含む形で成立しています。キリスト教は、教会と弟子たちによって預言者イーサーよりも後の時代に成立しているのです。

この二つの宗教の間の最も明白な相違点は、神への信仰において見られます。イスラームは神について、親戚、子ども、同等者、そして一切の共同作業者を持たない、唯一の存在であるアッラーという考え方を持っています。この意味で、アッラー以外に救い主は存在しないのです。イスラームのタウヒード（神の唯一性）は、崇高なるアッラーは唯一の存在であり、崇拝されるべき唯一の存在であるとしています。そのことにより、イスラーム教徒は神との間に何者も介在させることなく、崇拝行為を直接アッラーに捧げるようになったのです。キリスト教は、当初は唯一神信仰だったものの、特定の宗派を除き、短期間のうちに、多くの人々が異なる見解を持つようになりました。キリスト教における神の信条は、父と子と聖霊という三つの要素として表現されます。イーサーは神の息子、魂、そして言葉と見なされています。さらに、神について用いられる「父」という言葉は、その死や後継者を思わせるものとなります。

この二つの宗教の間のもう一つの重要な相違点は、預言者についての信条にあり

ます。イスラームでは、預言者はアーダムから始まりムハンマド（彼の上に平安あれ）によって終わりを告げています。だからこそ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、神の導きを伝えるアッラーの最後の使徒なのです。キリスト教においては、預言者イーサー以前の、アーダムからユーヌスに至る全ての預言者が認められているものの、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることは認められていません。なぜならキリスト教における預言者のあり方は、イーサーとともにその性質を変えてしまったからです。つまり、イーサーが神になったことにより、その預言者としての務めはイーサーの弟子たちによって引き継がれると信じられているからです。

この二つの宗教に共通して、世界が終わりを迎え、最後の審判があり、来世での生が始まるという信仰があります。一方で細かい部分については相違点もあります。

二つの宗教の間の崇拝行為に関する基本的な相違点は以下の通りです。イスラームでは、宗教上、思春期を迎えたイスラーム教徒の義務とされる礼拝、断食、ザカート（喜捨）、巡礼といった崇拝行為があります。キリスト教の崇拝行為はイスラームの崇拝行為とは異なっています。例えば、キリスト教にはイスラームのように時間が定められている崇拝行為はありません。キリスト教における崇拝行為は、神を讃える讃美歌を歌うことなどです。カトリックでは、「聖体拝領」と呼ばれる、パンとブドウ酒などの物質を媒介とした神性との交わりがあります。イスラームでは、一定の時間に定められた１日に５回の義務の礼拝と、イスラーム教徒の意志に任された義務ではない礼拝があります。キリスト教では断食は義務ではありません。イスラーム教徒は、毎年ラマダーン月（ヒジュラ暦の９月）の１か月間を通して、断食を行っています。この間、毎日、日の出から日没まで、一切の飲食を断ち、性交渉も行いません。

またイスラームでは、全ての子どもは清らかな、罪のない状態で生まれてきます。キリスト教では人は原罪を負って生まれてきます。イスラームでは罪の許しを求める人は、直接アッラーに許しを求めます。そのため、イスラームでは罪の告白を行うという制度はありません。キリスト教では、信者は神父に懺悔をします。しかし神父は罪を犯した人に、神の許しの希望を与えて慰めることはできますが、神が許されるかどうかに言及することはできません。イスラームでは、アッラー以外に罪を許すことのできる権限を持つ存在はいないのです。なぜなら罪を許す権限は、私たちの心に秘められたものをご存じであられるアッラーにのみ属するものだからです。

唯一神信仰が、最も論理的、合理的であると聞きました。その理由を教えてください

A　イスラームの最も根本的な原則はタウヒード、つまりアッラーの唯一性を認めることです。タウヒードは全てを包括する原則です。例えば、この世界は完全なる秩序と均衡の上に成り立っています。それが永遠に持続していくためには、創造主が唯一であることが論理的に必要となります。銀河や太陽系がある秩序のうちに存在し、惑星が互いに衝突することなく動いていることは、唯一の統治者、唯一の力、唯一の創造主の存在を示唆しています。

一方で、地球と太陽や月との関係、海中での生物の驚異的なあり方、空気中に放出される酸素の量といったあらゆることは、全てが唯一の統治者の力によって調えられているのです。クルアーンでは次のように記されています。「もし、その（天地の）間にアッラー以外の神々がいたならば、それらはきっと混乱したであろう。それで玉座の主、彼らが唱えるものの上に（高くいます）アッラーを讃えなさい」（預言者章第 22 節）。

実際、アッラーは崇高であられ、何者にも似ておらず、不足を示す全ての特性からかけ離れた御方なのです。そうでなければ、複数の、さらには無数の神の存在が必要となってしまいます。神は絶対的な力の持ち主であられ、世界はその統治を受けているのです。もし世界に複数の神が存在すれば、この世界は自然界の法則ですらその秩序を維持して機能することは不可能となっていたはずです。例えばある神が望む事象を、他の神は望まなかったでしょう。実際には、自然界の動きには明らかにある秩序と完全さが存在します。この世界における全ての事象は、偶然に、自ら生じたのだと主張することが果たして論理的でしょうか。アッラーが唯一存在されているからこそ、この世界の調和のとれた秩序は、創造された瞬間から一切の不足なく維持され続けてきたのです。

唯一神信仰（タウヒード）が、この世界の実情に即したものであることを認めることはけっして難しいことではありません。タウヒードを信仰の中心に置くイスラームの教えを受け入れる人の数は、歴史を通して増加の一途をたどっており、今日においてもその数は増え続けています。

Q11 唯一神信仰になじみがありません。この信仰を受け入れるためには何を行えばいいのでしょうか

A　アッラーは人間を、タウヒードの信条を受け入れることのできる本質を持つものとして創造されました。その例として、クルアーンには預言者イブラーヒームの話が紹介されています（家畜章第74－82節）。彼はアッラーを見出すために理性を用い、この世界を注意深く観察しています。さらにクルアーンは、アッラーのお力と崇高さを示すのと同じくらい多くの章句で、地上と天を注意深く観察するように命じています。存在や無、因果応報などについて深く考える人々に新たな視野を獲得させます。例えば、「私はなぜ存在するのか。なぜ創造されたのか。なぜ人間は全ての被造物よりも優れているのか。なぜ人間は意識を持っているのか。この人間の優位性に伴う責任はないのか。世界が存在する意図は何か。人は他の動物のように飲み食いして性交渉を行い、無責任な娯楽や消費といった単純な生活を送るだけで十分なのか。価値を加えるような行為とは何だろうか。私は死んだらどうなるのか。死によって全てが終わるなら生きることには何の意味があるのか。私の中にある善行を施したいという気持ち、良いもの、素晴らしいもの、価値のあるものを好む思いはどこから来るのか」といった問に対する答えを求めることができます。

先入観を持つことなく真摯に考えをめぐらせば、アッラーは人に正しい道を示され、信仰において彼を助けられるでしょう。崇高なるアッラーはハディース（言行録）で、そのことを明白に約束されています。「しもべが私に1カルシュ近づけば、私はしもべに1ズィラ（2カルシュ）近づこう。しもべが私に歩いてくれば、私は彼に走っていこう」（ブハーリー、タウヒード15）。

Q12 ファルド（義務）を実行しなかったり、禁じられていることをしてしまうイスラーム教徒は、どうなるのでしょうか。教えを棄てたことになるのでしょうか

イスラームは、単に信条や道徳を説く教えではなく、人間の生き方全体を包括する価値観の集大成なのです。もちろん良い行い、有益なこと、有意義な事柄の実践を求めています。

イスラームにおいては、全ての学者たちは信仰と崇拝行為が一つになることの重要性について一致した見解を持っています。信仰を守るとは、ファルドを実行し、ハラーム（禁止されていること）を避けることに関わっています。イスラームの信仰は、シルク（アッラーに何ものかを配すること）以外の全ての罪は、崇高なるアッラーが許されます（婦人章第116節）。さらに、シルクを行った人でも死ぬ前に悔悟しイスラームに入信すれば、崇高なるアッラーは彼をも許されることでしょう。

シルクを除く大きな罪を犯したイスラーム教徒は、「罪を犯した信者」と名付けられます。信仰の本質は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアッラーからもたらされた事柄を心から受け入れることです。人が犯した罪は、信仰の本質である心による受容が続いている限り、人を信仰の範疇から抜き出すことはできず、不信心に追い込むこともありません。このような人が死んだ場合も、永遠に地獄にとどめられることはありません。その罪に見合った罰を受けたのち天国に行くのです。信仰の本質が心による承認であることについては、クルアーンの多くの章句で言及されています（食卓章第41節、部屋章第14節）。

イスラームの最低条件が心による承認であったとしても、信仰の維持は、人が道徳的に成熟し、アッラーに従うことによって支えられます。なぜならイスラームに入るということは、その全ての教えを受け入れることだからです。イスラームが個人に求めるものは、ファルドを実践しハラーム避けることです。しかし誰かをイスラーム教徒と呼ぶ上では、彼がイスラームの命令に従っているかどうかが判断基準とはされません。そのため義務である一部の行為を実践しなかったというだけで、その人がイスラームを放棄したことにはなりません。信者は、礼拝し、喜捨を行い、巡礼するがゆえに信者と呼ばれるのではないのです。信仰しているがゆえに、これらの崇拝行為を実行するのです。この違いは明確に区別されなければなりません。なぜなら、行為はあくまで信仰の結果だからです。

信仰を持っているにもかかわらず、怠惰であるがゆえに、あるいは自分の欲望に負

け崇拝行為を実行しなかった人は、そのために信仰をなくすことはありません。このような人の定義は「罪を犯した信者」なのです。アッラーは罪を犯したしもべたちを、お望みにより許され、またお望みにより罰せられます。信仰告白の言葉を述べた人が、犯した罪の罰を受けたのちに天国に行くことに関しては多くのハディース（言行録）があります。

一方で、信者は、注意深くファルドを実行し、ハラームを避けなければなりません。罪を犯したり何かをしなかった場合には、誠実さを持ってアッラーにドゥアー（祈願）し、許しを求めなければいけません。要するに信者は、アッラーがハラームと仰せられたものをハラームとみなさず、ハラール（許されていること）だと仰せられたものをハラールと認めず、あるいはファルドであるものを怠慢から実践していなければ、罪を犯した信者とされるのです。だからその人は罪を悔悟し、その怠慢さを改めねばならないのです。なぜなら信者としての理想は、信仰と行為の双方を身につけている信者となることだからです。

Q13 信仰を維持することと、イスラームの規定や禁止事項に従うこととの間には何らかの関係があるのでしょうか

A 信仰の維持とは行為を継続して行うことに結びついたものです。イスラームでは考えや思いの段階でとどまっているだけでは、信仰としては不十分です。精神世界で輝いている信仰の光がより強く周囲を照らし、その存在を保っていくことが崇拝やアッラーへの服従といった行為の継続性に結び付けられます。

神が定められたことや禁じられたことに従うことは、信仰を強め同時に信者を来世での罰から救い、永遠の幸福に至らせる要因となります。イスラームを信じることの最低条件は、アッラーからもたらされた教えを心から受け入れることですが、信仰の継続的な維持は崇拝行為の実践にかかっています。完全な信仰を持ちながらも教えの規定や禁止事項を実践しなければ、教えから追放されることはないとしても、信仰の一端にとどまってしまうものとなります。

Q14 イスラーム教徒と結婚するために入信を考えています。しかし実際にはまだイスラームを受け入れていません。受け入れられなくて悩んでいます。私はどうすればいいのでしょうか

A イスラームの教えの最も根本的な原則の一つは、アッラーは人の行いを、そのニーヤ（意志）に注目して評価されるという点にあります。もう一つの原則は、人の信仰が疑いや不信、そしていろいろな見せかけを含まず、心からのものであるという点にあります。したがってイスラームを宗教として受け入れイスラーム教徒となる人は、その点に誠実でなければなりません。世俗的な利益のためにイスラーム教徒になったり、入信後、目的を果たしたからといって入信前の状態に戻ることは偽善です。

イスラームの考え方では、人は「信者」「不信心者」「偽信者」という三つのタイプに分かれます。イスラーム教徒ではなく、そのことを隠していない人は「不信心者」です。しかし、イスラーム教徒ではないのに、イスラーム教徒たちとともにいて、イスラーム教徒であるかのように振る舞う人は「偽信者」です。アッラーは偽信者について次のように仰せられています。

「また人びとの中、『わたしたちはアッラーを信じ、最後の（審判の）日を信じる』と言う者がある。だが彼らは信者ではない。彼らはアッラーと信仰する者たちを、欺こうとしている。（実際は）自分を欺いているのに過ぎないのだが、彼らは（それに）気付かない」（雌牛章第８－９節）。

生命の危険がある場合を除き、人が自分の信仰について他者をだますことは、どのような道徳的規範においても許されないものです。信者は全ての行いにおいて正しく誠実でなければなりません。イスラーム教徒との結婚のためにイスラームに入信することは、人生の重要な分岐点です。良い人格を備え正しい行いをすることが尊厳ある態度となるのです。

Q15 イスラームの命令と禁止事項の全ては、クルアーンに示されていますか

A イスラームの命令と禁止事項の全てはクルアーンで示されていません。イスラームの規定の最も重要な根拠が、スンナ（慣行）です。この二つの源に記されていない事柄については学者たちによる見解の一致によってイスラームに適っているか否かが判断されます。その際には、クルアーンやスンナからの類推、過去の学者たちの見解なども参考にされます。例えばクルアーンではワインがハラーム（禁止されていること）とされています（食卓章第90節）。しかし、ウイスキー、ビールといった飲み物がハラームとされたのは類推による判断によるものです。ワインがハラームとされたのは、それが人を酔わせる性質を持っているからです。したがって人を酔わせる飲み物は全てハラームです。

イスラーム法の働きの基本は、イスラーム法の方法論の独特の構造により、最善の形で体系化されています。イスラームの生活の全てをカバーする法体系をより良く理解するためには、イスラーム法学の文献を参考にすることができます。

Q16 アッラーはイスラームの教えをなぜもたらされたのでしょうか

A 崇高なるアッラーは、創造された人間たちをけっして放置しておかれることはありません。最初に人間を創造したとき以来、アッラーは人間にメッセージを送ってこられました。そのメッセージにより、人間をタウヒード、すなわちアッラーの唯一性を受け入れるようにと呼びかけてこられたのです。アッラーにどのように崇拝行為を行うべきか、さらに他の人々や被造物に対する考え方や振る舞いはどのようにあればいいのかを教えられました。しかし人間は、時の経過とともにタウヒードから遠ざかり、異なる道を歩み始めたのです。崇高なるアッラーはそのようなとき新たな預言者を遣わされ、タウヒードのメッセージを再度送られたのです。

この観点から考えるなら、イスラームは7世紀の初めに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通して下された教えではなく、全ての預言者を通して送られた全てのメッセージに共通する名称なのです。具体的にはイスラームとは、人類の歴史を通して送られてきた根本的なメッセージが、7世紀に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を通し、普遍的な形として新たにされた宗教といえます。

イスラーム以前の時代、預言者イーサーに送られた最後のメッセージに改ざんが加えられたため、アッラーのタウヒードの教えを改めて人々に伝え、踏みはずされた道から人々を正しい道へと導く教えが必要となりました。事実、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）以前のアラブ社会では偶像崇拝が行われ、複数の神への信仰が蔓延していたのです。血の報復により罪もない人々が殺害され、高い利子によって貧しい人々が搾取されていたのです。社会の中で相互に助け合うようなことは一切行われず、女の子が生まれると恥と見なされ生き埋めにされていました。売春が横行し、女性との無制限な結婚が行われていました。弱者はその権利を行使できず、法律は金持ちや有力者には適用されなかったのです。

Q17 イスラームの他の宗教に対する態度はどのようなものだったのでしょうか

A イスラームは強制的な手段を用いて、他の人々にイスラームの教えを布教しようとする意図は持っていません。なぜならそれは神の意志に反するものだからです。事実アッラーは「もし主の御心なら、地上のすべての者はすべて信仰に入ったことであろう。あなたは人びとを、強いて信者にしようとするのか」(ユーヌス章第99節)と仰せられています。またクルアーンの雌牛章でも、次のように仰せられています。「宗教には強制があってはならない。まさに正しい道は迷誤から明らかに（分別）されている。それで邪神を退けてアッラーを信仰する者は、けっして壊れることのない、堅固な取っ手を握った者である。アッラーは全聴にして全知であられる」(雌牛章第256節)。したがってクルアーンは、それ自体を「真実」と見なし、他の教えの信仰の正しさを否定しています。しかしそれらの存在を否定しているわけではけっしてありません。他の宗教も社会の一員と見なし、そこに属する人々も光を得るべく宗教を求めている人々と見なしています。事実、イスラーム諸国では、さまざまな宗教が多様な集団を形成し今日まで活動しています。

Q18 イスラームに入信した者にとって、最も重要な責任は何でしょうか

A　アラビア語でイスラーム教徒を意味するムスリムとは帰依する者という意味です。イスラーム教徒となった人は全存在をかけて、イスラームで説かれている義務や規範に従い、禁じられていることを避けなければなりません。そのためにはまずイスラームでは何が義務で何が禁止されていることなのかを学ばねばなりません。いくつかの例を示すなら、イスラーム教徒はタハーラと呼ばれる清めを行い、１日に５回礼拝に立たねばなりません。さらに断食や喜捨や巡礼といった崇拝行為を行うことなども義務です。一方で、殺人や姦通、窃盗や飲酒、呪術といったものが禁じられています。嘘をつかない、陰口をたたかない、家族に最大限の配慮をする、両親や親戚に良く振る舞う、信託物を尊重する、イスラーム教徒の兄弟の求めに応じる、人々の役に立つ、仕事の上で誠実で信頼される人となるといった道徳的規範を遵守することも重要な責任に含まれます。

Q19 日本は地震国です。大きな地震が起きるのはアッラーの警告でしょうか

A　地震はアッラーがこの世界において定められた自然界の法則の一つです。この意味で地震はアッラーのお力を示すものです。自然界で起こる全ての出来事は、同時に世界に対する、そして人々の行く末に対する警告でもあります。人々に注意を喚起するためにクルアーンでは「あなたがた見る目を持つ者よ、訓戒とするがいい」（集合章第２節）と警告されています。クルアーンは過去の人々の反抗的な態度について言及し、彼らが自然災害によって罰を受けたことを知らせています。しかし自然災害の全てを必ずしも神の罰であるととらえることはできません。地震が新たな水源やエネルギー資源の発見のきっかけとなることもあるのです。

人のなすべきことは、アッラーのご満悦にふさわしい生き方をし、他の自然災害と同様に適切な予防策を講じ被害を最小限にとどめるように努力することです。

Q20 人間は弱いものです。アッラーは人の犯した罪を許されるのでしょうか。許されないのはどんな罪ですか

A　崇高なるアッラーの最も重要な特質の一つは「多く許されるお方」（ガッファール）という点にあります。罪が許されるよう悔悟しない人は横暴な者とされています（部屋章第 11 節）。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は次のように語られています。「もしあなた方が罪を犯さない集団であったとしたら、アッラーはあなた方の代わりに罪を犯し、悔悟する集団を創造され、彼らの罪をも許されただろう」（ムスリム、悔悟 9）。この言葉は人間は本質的に罪を犯すものであるという意味であり、一方でアッラーの無限の慈悲を得るために努力しなければならないこと、罪深きがゆえに絶望してはいけないことが語られています。

崇高なるアッラーは悔悟された全ての罪を許されます。クルアーンには「彼こそは、しもべたちの悔悟を受け入れ、さまざまな罪を許し、あなたがたの行うことを知っておられる」（相談章第 25 節）と述べられています。クルアーンを読むと崇高なるアッラーは私たちの罪を許すことを望んでおられることがわかります。

崇高なるアッラーはクルアーンの次の章で、シルク（アッラーに何ものかを配すること）以外の全ての罪が許されると述べられています。「本当にアッラーは、（何ものをも）彼に配することを赦されない。それ以外のことに就いては、御心に適う者を赦される。アッラーに（何ものかを）配する者は、まさに大罪を犯す者である」（婦人章第 48 節）。ただしアッラーに何ものかを配する者であっても、死ぬ前にアッラーに許しを乞えば許される望みがあります。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は悔悟したことがどのようにして許されるのかについて次のように語っておられます。「誰かに、兄弟たちの自我もしくは彼に属するものに関する権利が遺されているのであれば、お金が役に立たない審判の日が来る前に、この世界で彼に会ってその権利を許してくれるよう求めなさい。もしそれが許されなければ、審判の日に、権利を侵害した者の善行から、その侵害に見合っただけのものが減らされ、その権利を持つ人に与えられる。もし彼に善行が存在しないのであれば、権利が侵害された人の罪が減らされ、その分が権利を侵害した人に加えられる」（ブハーリー、メザーリム 10、リカーク 48）。

Q21 悔悟が受け入れられるためには何が必要ですか

A 悔悟とは、辞書では「後悔すること、引き下がること」という意味です。イスラームでは、しもべが行った悪事や罪を悔やみ、それらを二度と行わないとアッラーに誓い、命令に従い禁止事項を避けることを通して許しを乞うことです。

罪のために悔悟を行うことはファルド（義務）です。クルアーンには、悔悟やそれに類する言葉が 86 回用いられています。悔悟は、預言者アーダムの時代から始まる、しもべであるというしるしです。クルアーンのある章句では、悔悟は謙虚に行わねばならないとされています（禁止章第 8 節）。謙虚な悔悟とは、心から真剣に、そして二度と同じ罪を犯さない誓いを前提に行われるものです。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も、他の事柄と同様に、「悔悟についてもウンマ（イスラーム共同体）の模範となられ、信者たちにも悔悟するよう呼びかけておられた」（ブハーリー、ダーワート 4、ムスリム、悔悟 1、78）。

イスラームでは、人が犯した罪がどれほど大きいものだとしても、悔悟の扉は常に開かれており、アッラーの慈悲は私たちの想像よりもはるかに大きいものです。大きな罪であれ小さな罪であれ、全ての罪は悔悟と懺悔によって許されるとクルアーンやハディース（言行録）で述べられています。実際、クルアーンでは次のように命じられています。「自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え、『それでもアッラーの慈悲に対して絶望してはならない』アッラーは、本当にすべての罪を赦される。彼は寛容にして慈悲深くあられる」（集団章第 53 節）。

したがって、どのような形であれ罪を犯した者は、その罪を省みてアッラーに悔悟しなければなりません。ある章句では「誠にアッラーは、悔悟して不断に（彼に）帰る者を愛でられ、また純潔の者を愛される」（雌牛章第 222 節）と述べられています。さらに、礼拝、喜捨といった善行を積むことも、罪の許しとなります。崇高なるアッラーはクルアーンで、「本当に善行は、悪行を消滅させる」（フード章第 114 節）と述べられています。

アッラーは罪を犯した者に、お望みによっては罪に応じた罰を与えられ、善行を積めば許されます。さらに崇高なるアッラーはクルアーンで「悔悟して信仰し、善行に励む者は別である。アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。悔悟して善行に勤しむ者は、本気でアッラーに悔いている者である」（識別章第 70 − 71 節）と仰せられています。この章句によれば、アッラーと同等に何ものかを配することから姦淫に至るまでの全ての罪は、同じ罪を再び犯さないことを前提として、心からの悔悟によって許されることが吉報として伝えられています。

結論として、次のように言うことができます。人は犯した罪に対して、「崇高なるアッラーに許しを願い、その御方に悔悟します」と言い、悔悟を行わなければなりません。罪を悔やみ、二度とその罪を犯さないことを誓わなければならないのです。悔悟を後回しにしてはいけません。なぜなら、人はどれだけ生きられるか、死がいつ訪れるかわからないからです。罪を犯したときにはすぐに悔悟し、その罪を消し去るために善行を積まなければならないのです。崇高なるアッラーの美しい名前の一つは「タッワーブ」であり、それは「罪を多く許されるお方」という意味です。だから私たちは罪を犯したならばただちに許しを求めなければならないのです。

Q22 死への恐れを克服するためにどうすればいいのでしょうか

A 人が死を恐れることには多くの理由があります。それは死が何を意味するかわからないこと、死が苦しみであると考えていること、死後自分が無となってしまうと考えていることなどです。

イスラームは、現世での生ははかないものですが、死は決して終りを意味しているのではなく、死後に永遠の生があることを教えています。信仰を持つ人は永遠の生を信じ、信仰を持たない人は死が無になることであり死によって命が終わると考えています。それゆえ来世への信仰を持つ人の死に対する態度は、信仰しない人々と同じではありません。

もし、死への恐怖が「死後、罰を受けることへの恐怖」によるなら、生前に罪を犯すことなく善行を積んで生きなければなりません。死から逃れることが不可避である以上、死に不安を抱くのではなく、来世において現世での行いが問われるということに不安を抱かなければなりません。クルアーンでは次のように述べられています。「あなたがた信仰する者よ、アッラーを畏れなさい。明日のために何をしたか、それぞれ考えなさい。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行うことに通暁なされる」（集合章第 18 節）。

イスラーム教徒は現世の日々の営みにとらわれ死や来世を忘れ去る人ではありません。死語の世界、すなわち来世のことを信じて生きる人のことです。その意味で、死後の世界はイスラーム教徒が内に抱いている思いなのです。

イスラーム教徒は来世で直面する状況を常に念頭に置いています。その意味で信者は常に死を恐れ、それを思い起こすことによって不安を感じている、信仰を持たない人々と同じではないのです。なぜなら、死や死後の世界について思いをめぐらせながら現世の生活を送ることによって、いつでも死に対する心構えができているからです。要するに、しっかりとした信仰を持ち、それにもとづいた宗教的な生き方をすることによって、生ある者は死をいつか訪れるものであると受け入れる準備ができているのです。

一方イスラームのスーフィー（神秘主義者）たちは、イスラーム教徒にとって死は「愛する人」との出会いととらえています。なぜなら、クルアーンの表現を借りるなら、崇高なるアッラーは信者たちにとって現世と来世における親しき友であり、援助者であり、庇護者であられるからです。イスラーム教徒は崇高なる創造主とのこうした結びつきが現世から来世へと引き続いていくよう、可能な限りの努力を払おうとするのです。

いくつかの伝承はアッラーと来世を信じる人は、死を迎えたとき慈悲の天使たちを見ること、死の瞬間の苦しみを味わうことなく、容易に魂を差し出すことができると伝えています。クルアーンの章句にも、「本当に、『わたしたちの主は、アッラーであられる』と言って、その後正しくしっかりと立つ者、彼らには、（次から次に）天使が下り、『恐れてはならない。また憂いてはならない。あなたがたに約束されている楽園への吉報を受け取りなさい。（と言うのである）』」（フッスィラ章第30節）と述べられています。またスーフィーたちは、現世において自らの魂を罪によって汚さぬよう、細心の注意を払いながら清貧な生活を送る人々です。したがって天使たちは、「あなたがたに平安あれ。あなたがたは自分の行った（善行の）結果、楽園に入れ」と言うのです（蜜蜂章第32節）。

Q23 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の行い（スンナ）に従うこととは、預言者の全ての態度や行動をまねることですか

A スンナとは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者として自ら行われた、あるいは行うよう勧められた模範的な態度です。預言者が示された、礼拝や断食、巡礼はどのように行えばいいのかといった宗教的な規範のことをスンナといいます。ただし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が人間であられることから、服装、飲食といった預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）

が生きておられた時代や地域にまつわる事柄については、それがスンナであるかどうかについては議論がなされています。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の預言者としての側面と、人間としての側面を考慮に入れるなら、預言者のスンナに従うということは、預言者が行われたことの全てを模倣するということを意味していません。もし、スンナがこのように理解されるのであれば、教友の全てが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の全ての行いをまねる必要があったでしょう。しかしこの点については、教友たちはさまざまなアプローチをしていたことが知られています。したがって最も的確に言えば、預言者は信者にとって最良の模範だということです（部族連合章第21節）。アッラーの使徒のまねをするのではなく、彼を模範とすることなのです。その際にも、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の模範的な行動の意図、英知、そしてその意味がどこにあるかを知り、それに従うことが必要です。例えば、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が藁の上に寝ておられたからといって、藁の上に寝ることはスンナではありません。しかし、預言者が質素で謙虚に浪費からかけ離れた生活をされたことは、どの時代、どの地域においてもイスラーム教徒全てにとって模範とすべきスンナとなるのです。食事の前後に手を洗うこと、食事の前に「ビスミッラー（慈悲深きアッラーの御名によって）」ということ、右手で自分の前にあるものを自分が食べられる分だけ取り無駄にすることなく食べること、そして食べ終わった後は「アルハムドゥリッラー（アッラーに感謝します）」と言って食事を終えることはスンナです。しかし地面に座って手で食べること、1日に2回食事をとること、一種類のみの料理を食べることなどはスンナではないのです。

Q24 なぜイスラーム教徒はユダヤ教徒と不仲なのですか

A イスラームはどのような個人、集団に対しても、彼らが信仰している宗教ゆえに危害を加えることは絶対に認めていません。それぞれの宗教に属する人は、自分の教えを信仰し実践する権利と自由を持っています。イスラームが認めていないのは、侵略や迫害、抑圧など他者の権利や法を侵害することです（雌牛章第193節）。

歴史上、ユダヤ教徒たちがイスラーム国家において、あるいは大多数がイスラーム教徒であるイスラーム社会において、何世紀もの間、平和と信頼のうちに生きてきたことが何よりの証です。今日も多くのイスラーム国家で、ユダヤ教徒たちは安全に暮らしています。一般に流布されているイスラーム教徒とユダヤ教徒が不仲であるとい

う言説は間違っています。

さらにイスラームは、他の宗教に属する人々と比較して、ユダヤ教徒やキリスト教徒をより自分たちに近い人々と見なし、彼らに特別の地位を与えています。なぜなら根本的に、この三つの宗教は同一の神による教えだからです。例えばイスラームは、イスラーム教徒の男性にユダヤ教徒やキリスト教徒の女性と結婚する許可を与えています。ユダヤ教徒やキリスト教徒の女性は自らの信仰を放棄することなく、イスラーム教徒の男性と家庭を築くことができます（食卓章第５節）。

このところユダヤ教徒とイスラーム教徒との間は、以前に比べると問題があるように映っています。それはユダヤ教徒が建設したイスラエルという国が中東に存続していることにあります。本来イスラーム教徒は、ユダヤ教徒がただユダヤ教徒であるというだけで彼らの敵になることはありません。なぜならそれは決してイスラームの教えにそぐわないものだからです。

Q25 なぜイラクではイスラームのスンニ派とシーア派が対立しているのでしょうか

A　イスラームの歴史のさまざまな時代において、宗教的、社会的、あるいは政治的な理由からいくつかのイスラームの分派が生じ、その後それぞれが独自の教義を形成したため、それらは宗派と見なされるようになりました。シーア派もそのカテゴリーに入れることができます。

スンニ派はイスラームの一つの宗派ですが、その中に多くの法的、神学的な学派を含んでいます。例えば、神学的にはアシュアリー派とマートゥリーディー派、法学派としてはハナフィー学派、シャーフィイー学派、マーリキー学派、ハンバリー学派がその中に含まれます。ただし近代においては、シーア派ではない人々の総称、すなわちシーア派の対義語として使われるようになっています。

シーア派は、アリーとその子孫のみがイマームとしてその共同体を率いることができるという考えのもとに生まれた政治的な分派であり、信条や法学の観点から独自の原則や規範を形成していったグループです。その後、シーア派からはさらなる分派も現れましたが、その多くは現在までその存在を維持できず、ザイド派とイランの公式な宗派である十二イマーム派が今日まで存続しています。

イラクはスンナ派とシーア派が混在している国です。今日イラクで起きている衝突は、宗教的なものではなく、外部の諸勢力が自らの利益を求めて仕掛けているものです。イラクで両者の歴史的な不和が政治的に利用されることによって、紛争の舞台が

用意され、そこに加えてテロなどの実行者が誰であるかわからないことによって憎悪や敵意による騒乱の引き金が引かれてきたのです。事実、スンニ派及びシーア派の学者たちはあらゆる機会を通じて、こうした動きが平和と安全を失わせることを意図した挑発的な行為であると指摘しています。スンニ派であれシーア派であれ、全てのイスラーム教徒は兄弟であるという認識を持って行動すべきであり、考え方の違いについてはお互いに寛容でなければなりません。克服することのできない歴史的な不和ではないので、相互理解のもとイスラーム教徒としての結束を固めるよう努力していかねばなりません。

清潔さについて

Q1 イスラーム教徒の清潔さにまつわる責任とは何でしょうか

A 清潔さはイスラームの教えの最も基本的で、かつ最も重要な条件の一つです。イスラームが清潔さに置いている重要性を最も端的に示すものが、崇拝行為が清潔さを条件としていることです。イスラームでは清潔さは一つの崇拝行為としてなされるものです。なぜなら、ウドゥー（小浄）であれグスル（大浄）であれ、それらは宗教上の命令だからです。クルアーンには、「誠にアッラーは、悔悟して不断に（彼に）帰る者を愛でられ、また純潔の者を愛される」（雌牛章第222節）と述べられています。例えば、歯を清潔に保つことを指摘するハディース（言行録）には、「ウンマ（イスラーム共同体）にとって困難でなければ、彼らに礼拝に立つ前にミスワーク（歯の洗浄のための木の枝）を命じていたことだろう」（ムスリム、タハーラート252）と述べられています。また別のハディースでは次のように述べられています。「次の五つのことは、人間の本質が求めているものである。割礼を受けること、鼠蹊部の毛をそること、爪を切ること、脇の下の毛を剃ること、髭を短く整えること」（ブハーリー、リバース63）。

この機会に、イスラーム教徒の入浴に関しての注意すべき作法についても触れておきます。性的交渉の後にグスルを行うことは義務です。入浴の際にもグスルを行うことが奨励されています。そのときには排泄器官やへそなどを洗った後でウドゥーを行い、それからグスルを行わなければなりません。

崇拝行為について

Q1 1日に5回の礼拝を行うことは今の生活では困難です。どうすればいいのでしょうか

A 人間は精神と肉体から成り立っている生命体です。それゆえ健康は精神と肉体の両方が健全でなければなりません。私たちの肉体はいくつかの生物学的法則に基づいて動いています。体内の組織で生じた異常は病気という形で現れます。そのときには病気の治療のために医学を専門とする医師に相談します。

一方で人間は精神を持った存在でもあります。精神状態が落ち着いていれば、肉体にプラスに作用し、落ち着いていない場合は肉体にマイナスに作用します。もし人が健康であることを望むなら、肉体と精神双方の健康状態が良好であらねばなりません。肉体が健康のために飲食を求めるように、精神も満たされねばなりません。クルアーンでは精神が求めるものはズィクル（唱念）であると告げられています。「これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである」（雷電章第28節）。

この意味で、アッラーへの唱念とは、アッラーの命令に従い、禁止されていることを避け、常にアッラーを唱え念じていることを意味しています。信仰とは人がイスラーム教徒となり、自らの魂の安らぎを見出すことを意味します。とはいえ信仰は崇拝行為によって強化されなければなりません。崇拝行為はその形も意義も重要です。そのどちらかが不足しても、崇拝行為から期待される道徳的、精神的な効果は得られません。

崇高なるアッラーは、しもべに無限の恵みを与えられました。その恵みへの感謝を表明する機会として崇拝行為が義務とされたのです。崇拝行為はしもべにとってたいへん有益なものです。崇拝行為はしもべが精神的に成熟し落ち着いて穏やかな境地へと至る助けとなります。その意味で、崇拝行為は人間にとって決して重荷ではないのです。崇拝行為に費やされる時間は、人が精神的に満たされ、新たな力を得る時間なのです。

したがってイスラーム教徒は、原則としてアッラーの命令である崇拝行為を自らの

世俗的な用件よりも優先させねばなりません。はかない現世での生の営みを、来世での永遠の幸福を獲得する機会として使わなければならないのです。

また崇拝行為の時間や形式がアッラーによって定められたということを私たちは十分に認識しなければいけません。クルアーンでは次のように語られています。

「彼が創造されたものを、知らないであろうか。彼は、深奥を理解し通暁なされる」(大権章第 14 節)。当然アッラーはしもべの能力をよくご存じで、できないような責務を負わせられることはありません。「アッラーは誰にも、その能力以上のものを負わせられない」(雌牛章第 286 節)。人間の本質が変わらない限り(絶対に変わらないでしょうが)、崇拝行為の時間や形式が変わることはないでしょう。現代人の日々の多忙さは崇拝行為の数を減らす正当な理由とはなりません。逆に仕事中心のあわただしい生活の中で、適宜に行う崇拝行為は人にアッラーを思い起こさせ、アッラーの教えに従って正しく生きることを助長してくれるのです。

Q2 イスラーム教徒は礼拝のときに、なぜマッカのカアバ神殿の方角に向くのですか

A 崇拝行為は、アッラーが命じられ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が実践された形で行われます。カアバ神殿に向かって礼拝を行うことはアッラーが命じられたことです。クルアーンでは次のように命じられています。「われはあなたが（導きを求め)、天に顔を巡らすのを見る。そこでわれは、あなたの納得するキブラに、あなたを向かわせる。あなたの顔を聖なるマスジドの方向に向けなさい。あなたがたは何処にいても、あなたがたの顔をキブラに向けなさい。本当に啓典の民は、それが主からの真理であることを知っている。アッラーは、彼らの行うことに無頓着な方ではない」（雌牛章第 144 節)。

世界のどこにいてもイスラーム教徒は、礼拝を行うときにはマッカのカアバ神殿に向かって立ちます。全てのイスラーム教徒が同じキブラ（礼拝の方角）に向かって立つことによって一体感を獲得し力を培います。一つの方向に向かって立つことはタウヒード（神の唯一性）を示しています。

Q3 なぜカアバ神殿を周回するのですか

A カアバ神殿の周回もアッラーの命令によるものです。カアバ神殿は人類最初の礼拝所です。それゆえイスラーム教徒は、その場所に特別の重要性と価値を置いているのです。神殿を周回することは、イスラーム教徒がその生き方の中心にアッラーのご満悦を置き、神の命令に従い道を逸れることなく生きていくことの象徴でもあります。また周回は小さな存在から大きな存在まで全ての被造物がアッラーを念じていること、人もそこに加わっていることの象徴です。原子核の周囲をまわる電子、1 秒も休むことなく肉体の全ての細胞をめぐる血液、何百万年も地球の周囲をまわってきた月、太陽の周囲をまわり続ける地球のように、イスラーム教徒もまたカアバ神殿の周囲をまわるのです。

Q4 イスラーム教徒はなぜ断食を行うのですか。断食の英知とは何ですか

A イスラーム教徒は断食をアッラーが命じられた崇拝行為であるゆえに行います。同時に断食は精神的、肉体的、社会的に多くの英知を含んでいます。

アッラーは、全ての疾患に治療法、全ての病気に薬を与えられたように、悪事に対してもそれから遠ざかる方策を与えられています。断食は人を悪事から守る盾です。断食による空腹と渇きは、いつでも私たちはアッラーの御前にいるという意識を強めます。それによって人は現世での悪から遠ざかることができ、地獄の罰からも救われます。

断食は単純に「食べない」という行為ではありません。断食は徳を高めます。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は次のように語られています。「誰であれ、嘘をついたり、嘘で仕事を進めたりすることをやめなければ、アッラーはその人が飲食を断ったことに価値を与えられない」（ブハーリー、サウム 8)。

断食は感謝する心を育みます。断食月ではないときには、人は真の空腹を味わうことがないため、アッラーからの恵みのありがたさを正しく理解することができません。しかし断食月には、毎日、日没でその日の断食を終えるまで、昼間、長時間空腹と渇きの中にいた人は、一杯の水、一切れのパンのありがたさを感じることができます。

社会には貧しい人も、中流の人も、豊かな人もいます。崇高なるアッラーは人間社

会にこうした差異があるがゆえに、豊かな人は貧しい人々の欠乏を満たし、彼らを援助するよう命じておられます。豊かな人が貧しい人を援助することは、豊かな人が断食によって空腹を実感することによって初めて可能となります。
長時間稼働している機械が定期的に点検を受ける必要があるように、前の年の断食以来１１か月間働きづめで疲れている体の組織（消化器官）も、年に１回、この１か月くらい休ませ点検する必要があります。こうしたことが断食によって最善の形で実現されることなのです。

Q5 イスラームの犠牲祭で何百万頭もの動物が屠られることを崇拝行為と見なすことは正しいのでしょうか

A アッラーは他の恵みと同様に動物たちも人間のために創造され人間へ奉仕するものとして与えられました。しかしイスラームではどのような形であれ、動物を苦しめ彼らに害を与えることを禁じています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の多くのハディース（言行録）には、動物たちへの慈悲についてさまざまなエピソードが残されています。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ネコを飢え死にするまで家に閉じ込めていた女性について、その行いゆえに彼女は地獄に行くと話されました（ブハーリー、アンビヤー 54)。別のハディースでは、のどの渇きに苦しむイヌに靴を使って井戸から水を汲んで飲ませた人は、罪を許されると説かれました（ブハーリー、シルブ 9)。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、顔に焼印を押されたロバを見て、その悲しみを次のように表現されました。「この動物の顔に焼印を押した者にアッラーの呪いがありますように」（ムスリム、リバース 107)。またあるとき数人の教友たちが鳥の巣を見つけ、巣の中のヒナを取り出してかわいがりはじめました。するとそのときに母鳥が来て、ヒナが教友たちの手にあることを知ってバタバタと羽音をたてて騒ぎ始めました。アッラーの使徒はその様子を知り不快に思われ、すぐにヒナを巣に戻すように命じられたのです（アブー・ダーウード、ジハード 112)。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は動物への虐待を防ぐため、いくつかの禁止事項を設けられています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、動物たちを飢えと渇きのうちに放置すること、殴打すること、無用に競わせること、子どもを親から取り上げること、動物たちの能力を超えた重荷を負わせることなどを禁じられていました。動物を虐待している者がいれば警告を与えられました。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、動物に対して物理的な暴力だけではなく、悪い言葉を投げかけることも許されませんでした。自分が乗っている動物に呪いの言葉をかけていた女性に、その動物から下りるよう命じられています（ムスリム、ビッル 80)。
動物に対し良く振る舞うことが善行となるかどうかと尋ねられたときに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「全ての命あるものに対し行われた良い振る舞いは善行となる」と答えられています（ムスリム、サラーム 42)。
また預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はあるときに、「アッラーは、慈悲深い人に慈悲を持って振る舞われる。だからあなた方は地上の被造物に対し慈悲深くありなさい。アッラーもあなた方に慈悲を持って接して下さるように」（アブー・ダーウード、アーダーブ 58）と言われています。
祭事のとき動物を屠るという行為は、ひたすらアッラーを称え、アッラーに近づくためになされます。この崇拝行為が行われる意図は、アッラーのご満悦を得ることにあります。そして、屠られた動物の肉は、アッラーのしもべに対する慈悲ゆえに人間が消費することができるのです。
動物を屠るときには、大前提として動物を苦しめてはいけません。暴力を用いることなく屠畜場まで連れて来ること、そしてよく研いだナイフで、可能であれば動物の目を覆って屠畜しなさいと言われています。屠った動物の肉は原則として三つに分けられます。その一部分は家族のために、一部分はそれを必要としている貧しい人々に、残りの一部分はイスラーム教徒であるかないかを問わず隣人に配られます。

Q6 イスラームの説くジハードとはどんな意味ですか。暴力を奨励するものではないのでしょうか

A 辞書的な意味でジハードは、奮闘努力をすること、良い結果を得るためにできる限りのことをするといった意味になります。宗教的にはクルアーンやハディース（言行録）の教えを学ぶこと、学んだ知識を教え伝えること、そこに記されている命令に従うこと、禁止されていることや罪に対し戦うこと、すなわちイスラームを知り、実践し、徳を高めるために努力することを意味しています。またイスラーム教徒に戦いを挑む者に立ち上がって戦うことも意味しています。クルアーンの「アッラーの（道の）ために、限りを尽くして奮闘努力しなさい」（巡礼章第 78 節）という言葉は、それらの全ての意味を包括するものなのです。
このようにジハードは多義的な概念です。したがってイスラーム学者たちはジハー

ドについてさまざまな定義を下しています。それによるとジハードとは、「真実の教えへと導くための活動」「シャイターン（悪魔）と我欲に対してなされる戦い」「敵の攻撃に対する防衛の戦いにおいて全力を尽くすこと」「アッラーにしもべとして仕えること、そしてアッラーとその使徒が示された規範を人々に伝えること、それをさまざまな脅威や攻撃から守ること」などです。

　このようにイスラームのジハードには、神の道において奮闘努力することから社会的な任務や責任を果たすことまでさまざまな側面があります。ジハードの最後の形が戦いなのであれば、それはただ防衛のためやむを得ない場合に限られているのです。

　イスラームは侵略を目的とする戦いを認めていません。戦いはイスラーム教徒の安全を守り基本的権利や自由を守るためだけに行われるのです（雌牛章第 205 節、婦人章第 94 節、物語章第 83 節、詩人たち章第 41 － 42 節）。事実、クルアーンで戦いについて言及されている箇所では、戦いの端緒が相手側にあることがよくわかります。限定的な場合を除き、決してイスラームが戦いを奨励しているものではないのです。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も「人々よ、敵と対決し戦うことを願ってはいけない。アッラーに、あなた方を戦いから守るよう求めなさい。敵と対面したときには忍耐しなさい」（ブハーリー、ジハード 112、156）と命じられています。

　ジハードはその状況、時期、条件などにより以下のように分類さています。

言葉で行われるジハード

「だから不信者にしたがってはならない。彼らに対しこの（クルアーン）をもって大いに奮闘努力しなさい」（識別章第 52 節）というクルアーンの章句で、この種のジハードが命じられています。クルアーンとそこに述べられている規範を学び、教え、イスラームを人々に説くことなどが、言葉によって行われるジハードの範疇に含まれます。それは教育によるジハードともいえます。

人が自らの心の中の堕落、怠惰、腐敗などと戦うジハード

　信仰し、誠実に振る舞い、自ら罪ある言葉や行為、態度から遠ざかるよう努力することは、ジハードの最も重要なあり方です。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「真の戦士とは、自己中心的な欲望と戦う者である」（ティルミズィー、ジハード 2）と述べられています。それは、諸悪と闘う克己のジハードと呼ぶことができます。

財産や生命によって行われるジハード

　これはイスラーム教徒を攻撃する者に対し、生命や財産を差し出して戦うジハードです。クルアーンでは、「そしてあなたがたの財産と生命を捧げて、アッラーの道のために奮闘努力しなさい」（悔悟章第 41 節）と命じられています。

　このようにイスラームは「ジハード」を戦争という狭い意味に限定せず、広くとらえています。神の真実を人々に説き、そのために汗を流し、ときには独裁者に対し不

正を訴えることもまたジハードと見なされます。さらに、学問の発展に寄与したり、善行を奨励することもジハードの範疇に含まれます。

Q7 イスラーム教徒になっても、全ての規範や禁止事項を守り、実践していくことは難しいのではないかと心配しています

A　イスラームが求める責任はその人の力に応じたものと考えます。アッラーは誰にも、その能力を超えた責任を負わせられることはありません。なぜならクルアーンでは次のように命じられているからです。「アッラーは何人にも、その能力以上のものを負わせられない。人々は、その行ったことで己を益し、その行ったことで己を損なう」（雌牛章第 286 節）。例えばイスラームでは経済的に余裕のある人は喜捨を行い巡礼に行きます。しかし貧しいイスラーム教徒にはそのような責任はありません。ただ全てのイスラーム教徒が実践すべき、すなわちしもべであることによる義務としての行為は存在し、その実践については責任を負っています。

　信仰する者は、全てアッラーのご命令と禁止事項を受け入れ、力を挙げてそれらを実践するために努力を傾けねばなりません。信仰心がありながら崇拝行為を怠ったからといって、その宗教を離脱する必要はありません。しかしその人は罪を犯した人となります。したがって、実行することができなかった、あるいは忘れていたため行えなかった崇拝行為があれば、その分を補わねばなりません。

ハラールとハラームについて

Q1 イスラーム教徒の女性はなぜ頭部を覆わなければならないのですか。イスラーム諸国によってスカーフの形や色が異なっているのはなぜですか

A イスラーム教徒の女性が、顔や手、足以外の全身を覆うことはアッラーの命令です。クルアーンでは次のように命じられています。「信者の女たちに言ってやるがいい。かの女らの視線を低くし、貞淑を守れ。外に表われるものの外は、かの女らの美（や飾り）を目立たせてはならない。それからヴェイルをその胸の上に垂れなさい」（御光章第31節）。また別の章句では次のように命じられています。「預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに長衣を纏うよう告げなさい」（部族連合章第59節）。このように覆うことはアッラーの命令であり、アッラーに対し果たすべき責務なのです。正当な理由がない限り成人女性はこの命令に従わなければなりません。これは一方で、彼女たちを守るための予防策でもあります。しかし、何らかの理由で頭部を覆うことができない女性は、アッラーに許しを乞えば覆わなくてもよいとされています。また、誰であれ女性が頭を覆っていない、もしくはさまざまな理由で覆うことができないからといって、宗教上の兄弟を仲間外れにしたり蔑視したり、イスラーム教徒ではないと見なすことは正しい行いではありません。

頭部の覆い方にはそれぞれのイスラーム教徒たちの置かれている民族的、地理的、文化的状況の違いが反映されています。ご存じの通りイスラームは世界各地に広まっています。地域によって人々の好みや伝統はそれぞれ異なっています。イスラーム学者は、覆いは体の線をあらわにすることなく、肌が透けない布であることと説いています。

Q2 イスラーム教徒になると割礼をしなければなりませんか

A 割礼は男性の性器の包皮の先端を切ることを意味しています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は割礼を行うことを奨励されています（ブハーリー、リバース62、ムスリム、タハーラ49）。割礼は預言者たちの父イブラーヒームの時代から行われてきた宗教的行為です。ユダヤ教徒たちも現在に至るまで割礼を行っています。キリスト教では割礼は肉体的なものではなく精神的なもの（心の割礼）と定義され、行われなくなっています。

割礼には健康面でも多くの効用があるとされています。それゆえイスラーム教徒となった人にとって、割礼は義務ではないものの、健康上の問題がない限り年齢を問わず行うことが勧められています。

Q3 イスラーム教徒は、イスラーム教徒ではない人が屠った肉を食べることは許されていますか。多くの食品には豚脂が含まれている可能性があり、食べられるかどうか疑わしいという人がいます。疑わしい食品を避けるとすると、食べられるものは非常に少なくなってしまいます。どうしたらいいのでしょうか

A クルアーンとハディースで述べられている動物の肉に関する制限は、意図的にアッラーからの恵みから遠ざけたり、その食べ物を神聖視することを目的としているのではありません。ハラール（許されていること）、ハラーム（禁止されていること）と区分けする基本的な意図は、イスラーム教徒を人間としての誉れと尊厳にふさわしい振る舞いに向かわせ、有益なことを守らせるためです。

ユダヤ教徒やキリスト教徒のように、アッラーを信じ預言者に従う真の教えに属しつつも、時間の経過とともに正しい道から遠ざかり、最後の真実の預言者であられるムハンマド（彼の上に平安あれ）を信仰しない人々は啓典の民と名付けられています。イスラームと近い宗教であることから、イスラーム教徒の男性はユダヤ教徒やキリスト教徒の女性と結婚することができ、彼らの屠った動物の肉を食べることをハラール（許されていること）としました。クルアーンでは、「今日（清き）良きものがあなた

がたに許される。啓典を授けられた民の食べ物は、あなたがたに合法であり、あなたがたの食べ物は彼らにも合法である」(食卓章第５節）と述べられています。クルアーンにおける「啓典を授けられた者」とは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を指していることは明らかです。

イスラーム教徒は仏教、神道、道教、ヒンズー教、ゾロアスター教など啓典の民ではない人によって屠られた動物の肉、またはそれらの肉が含まれた食品を食べることはできません。豚肉や豚脂が含まれているものも食べることはできません。海の生物は食べることができます。

家で用意する食べ物については、ハラールのマークある肉を選択することができます。預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)はイスラーム教徒に対し、ハラールかハラームか明らかではない食べ物を避けるようにと言われています（ブハーリー、イーマーン 37)。

一般的に、以下のものを含む食品の飲食は認められていません。

豚肉、豚肉由来成分を含む食品、アッラーの名前を唱えることなく処理された牛肉や鶏肉、洋酒、ワイン、酒精、アルコール、ラード、豚脂、動物由来のショートニング、ポークエキス、動物由来のゼラチン。

イスラーム教徒として定められた規範に従って教えを実践する努力をすれば、アッラーの援助を得ることができるでしょう。

Q4 なぜイスラームでは豚肉を食べたりアルコールを飲んだりすることが禁止されているのですか

A アッラーが禁じられていることのなかには、その理由が明白にされているものと、されていないものがあります。しもべとして私たちの行うべきことは、禁止されている理由やその英知が人間のためになるかどうかわからなかったとしても、アッラーがハラール（許されていること）とされたものはハラールとして、ハラーム（禁止されていること）とされたものはハラームと認め、それを生きていく上での指針としていかねばなりません。

イスラームは宗教、生命、知性、子孫、そして財産からなる人間の５つの基本的要素を守ることを目標としています。

酒はこの５つの中の知性を守るために禁じられました。人は酒を飲むと人格が変わったり、暴力的になって他人を傷つけたり、命を奪うような交通事故を起こしたり、ときには殺人まで起こすものです。さらに飲酒は肝臓病を始めとする多くの病気の原

因となっています。

飲酒がハラーム（禁止されていること）であることはクルアーンに次のように示されています。「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう」「悪魔の望むところは、酒と賭矢によってあなたがたの間に、敵意と憎悪を起こさせ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとすることである。それでもあなたがたはつつしまないのか」(食卓章第 90 − 91 節)。

このように、クルアーンの章句では飲酒が社会生活に及ぼす深刻な影響、宗教生活に及ぼす罪について言及されています。

一方で酒には効用があり過度に飲まなければ、その害を避けることができると主張する人々もいます。しかし明記しておかねばならないことは、酒は一般的に害の方が多く自分や他人の人生さえ狂わせかねないもので禁止した方がいいということです。

豚肉についてはクルアーンの５つの章句（雌牛章第 173 節、食卓章第３節・60 節、家畜章第 145 節）で食べることが禁止されています。食卓章第３節では、豚肉とともに禁じられているその他の食べ物について言及した後、それら全てが「フスク」であると述べられています。フスクとは宗教用語で「正しい道から逸れる、反抗する、アッラーの命令や禁止事項に従わない、罪や犯罪を行う」という意味です。

イスラームの教えで、いくつかの食べ物がハラームとされていることにはさまざまな叡智や意図があります。食べ物にまつわる禁止や制限は、人の肉体や精神の健康維持にかかわっています。豚肉には人の心身の健康に悪い影響を与えるものが含まれているのです。

Q5 酔わない量であれば、アルコールを摂取してもいいのではないでしょうか

A アッラーがハラール（許されていること）とされたものには益があり、ハラーム（禁止されていること）とされたものには害があるということは明らかにされています。そしてアッラーの命令や禁止事項には無条件に従わねばなりません。アッラーはアルコール飲料をハラームとされました。それが少量だと人を酔わせないからといって、ハラームとされたことを覆すものとはなりません。なぜならハラームなものは、それに害があるという理由からではなく、アッラーが禁じられたがゆえにハラームだからです。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「人を酔わせるものはハラームである。多量に使用して人を酔わせるものは、少量

であってもハラームである」（イブン・マジャ、アシュリバ 10）と仰せられています。したがって何かがハラームであることを、ただその有害性と結びつけることは適切ではありません。たとえ酔わない量であってもアルコールを摂取することはイスラームでは禁じられているのです。

Q6 イスラームの女性と男性の衣装に関する規定にはどのようなものがありますか

A　イスラーム学者は、クルアーンやハディース（言行録）をもとに男女が覆うべきところを次のように規定しています。男性は膝頭からへその間、女性はイスラーム教徒の女性の前ではへそと膝頭の間、宗教的に結婚できない男性に対しては顔、頭部、髪、胸元、足、脚、手、腕を除く体の各部分、宗教的に結婚できる男性に対しては顔と手と足を除く全ての部分が覆うべきところです。

Q7 臓器移植はイスラームでは許されていますか。許されているとすればその条件は何でしょうか

A　臓器や体の組織の移植については、クルアーンやハディースに明白な規定は示されていません。クルアーンやハディースに明白な規定がなく時代、時代で新たに直面した問題については、イスラーム学者たちがイスラームの全体的な原則や、明らかになっている規範から類推して可能な限り答えを出す努力を続けてきました。

周知の通り人間は誉れある存在です。アッラーは被造物の中で人間に特別の地位、すなわち尊厳を与えられました。それゆえ通常の死亡したあるいは生きている人から取られた体の組織や臓器を移植することは、人の尊厳にそぐわないとイスラーム学者は判断しています。

イスラーム学者たちはさまざまなクルアーンの章句を根拠に、必要不可欠で代替案がない場合には、禁じられている事柄を必要に応じて行うことが許されているとの結論に達しています。例えば、母胎に生存している胎児を救うために亡くなった母親のお腹を開くこと、他の治療方法がないとき折れた骨の代わりに人工骨を置換すること、生きている人を救うために死者の体の組織の一部を移植すること、解明されていない病気について研究し治療が行えるようにするために、近親者の了承を得て死者の体を解剖することは許されています。イスラーム学者たちは飢えや渇きの場合と同様に、病気のときもやむを得ない状況下では禁止されていることを行ってもいいとの許可を出しています。また他に治療方法がない患者については、禁止されている薬物による治療を許可しています。下記の条件における臓器や組織の移植は許されています。

－病人の生命にかかわる組織を治療するため、それ以外には治療法がないことが専門医によって確定されていること。

－医師の判断によって、その手段によって治療できる確率が高いこと。

－腎臓のように体に２つある臓器や、部分的な肝臓の移植の場合を除き、臓器提供者が、その処置が行われる時点で死亡していること。

－臓器提供者が生前に臓器の提供を許可していること、あるいはその人が生前に移植を拒否していないということを前提に近親者がそれを承認していること。

－摘出される臓器や組織の対価として費用が一切支払われていないこと。

－治療を受ける患者も自らが受ける移植について了承済みであること。

Q8 イスラーム教徒がスポーツを行う際に気をつけなければならないことは何でしょうか

イスラームはイスラーム教徒の健康や疲労回復のためにスポーツをすることを奨励しています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「強い信者は弱い信者よりも尊い」と語られ、強くなる手段の一つとしてスポーツを行うことを勧められています。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「弓道や馬術を学びなさい」（アブー・ダーウード、ジハード 23）と命じられています。また預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、妻アーイシャと２度競走し、１度目はアーイシャが預言者に勝ち、２度目はアーイシャが太っていたために負け、競走に勝った預言者が妻に「これは前回の競争のお返しだ」と言われたと伝えられています（アブー・ダーウード、ジハード 61）。

力と技を競うことも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が自ら行われていたスポーツの一つです。またあるハディース（言行録）では、「子どもが父親に対して持っている権利は、父が彼に文字を書くことを教え、水泳や弓を射ることを教えることである」（スユーティ、アルージャミーウッサウル 3742）と述べられています。

今日のスポーツの多くが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代には存在していませんでした。それゆえイスラームの命令や禁止事項に反しない全てのスポーツが許されているということができます。実際イスラームはスポーツを観戦すること

よりも自らスポーツを行うことを奨励しています。

スポーツを行う際に注意しなければいけない点は、以下のようにまとめることができます。ボクシングのように互いに傷つけるスポーツは行わない。スポーツを行うときにも礼拝を始めとする崇拝行為を不足なく行わなければならない。競技中、イスラームの教えを否定するような相手を冒涜する行いや言葉を口にしたりしてはいけません。体を覆うという規範を尊重しなければならない。通常の休暇や余暇の範囲を超え時間を無駄にするようなことがあってはなりません。試合が賭博の対象となってはなりません。

Q9 イスラームは音楽を聴くことについてどのように考えているのでしょうか

A　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、宗教上ふさわしくない音楽を除き、自ら音楽を聴いたりすることを好まれ教友たちにも勧められていました。妻のアーイシャにより伝えられている有名なハディース（言行録）があります。「あるときアッラーの使徒が私のそばにおられました。それから私のそばには女の奴隷が２人いました。彼女たちは歌を歌っていました。アッラーの使徒は寝床に横になられ、顔を反対側に向けられました。そのとき、父のアブー・バクルが私たちのところに来て、私を叱ったのです。『アッラーの使徒のおそばでシャイターン（悪魔）の楽器を演奏しているのか』。アッラーの使徒はアブー・バクルに向き直られ、『彼女たちにそのまま続けさせなさい』と言われました」（ブハーリー、イダイン 3、イブン・マジャ、ニカーフ 21）。

イスラームは人間が本質的に求めるものに重きを置き、飲食や性的交渉といった肉体的欲求を満たすことをムバフ（許されたもの）と見なしています。同様に人の精神的欲求を満たすこともムバフとされます。ただ他のムバフと同様に、その音楽がハラーム（禁止されていること）の対象であれば、それは禁止となります。すなわちその内容にイスラームの教えを誹謗中傷したり、イスラームがよしとしない言葉が含まれていたり、不道徳なものが含まれていてはいけません。

Q10 日本では年間3万人近い人が自殺しています。しかしイスラーム社会では自殺は非常にまれだそうです。それはイスラームの教えと関係があるのでしょうか

A　イスラームでは自ら命を絶つことは大きな罪の一つです。なぜなら人は自らの命を自由に断つ権利を持っていないからです。このことからイスラームは、人の命を奪うことと同様、自分で命を絶つことも厳しく禁じています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「誰であれ、山から身を投げて自殺をすれば、彼は地獄に行くことになる。地獄で永遠に山から身を投げ続ける。誰であれ毒を飲んで自殺をすれば、彼は地獄の炎の中で、永遠に手にした毒を飲み続ける。誰であれ、自らに刀を刺して自殺すれば、地獄で永遠にその刀を刺し続ける」（ブハーリー、トゥッブ 56）と、自殺をした人は地獄に行くと言われています。なぜなら、生命を神聖なものと見なすイスラームは、不正に人を殺すことは全人類を殺すことに等しいと見なし、一人の命を救うことは全人類の命を救うことと等しいと見なしているからです（食卓章第 32 節）。

自殺は絶望や破綻、痛みや苦しみの悲劇的な結末です。自らが試練のために現世に送られていることを信じ、信仰の求めるところとしてアッラーを信頼し、そのことを支えとする人は決して絶望したり悲観したりしません。苦しみや痛みや悲しみに耐え、どのような過酷な条件下にあってもアッラーへの信仰と信頼を失わないことがイスラーム教徒の大きな特性です。

イスラーム教徒は現世の苦しみゆえに自殺することはありません。なぜなら、信者にとって現世の最大にして最悪の事態ですら、地獄の炎よりも恐ろしいことはないからです。現世での困難、苦労はイスラーム教徒にとって結局は一時的なものでしかないのです。今日、耐え難いものとされ、耐えることができない人々を自殺へと追いやっている出来事も、時がたてば悲しむ価値もないものであることがわかり忘れ去られるものです。イスラーム教徒は困難の後には必ず安寧が訪れることを信じ希望を持って生きているのです（胸を広げる章第 5 － 6 節）。

イスラームには人が絶望観にとらわれることを防ぐ重要な信仰があります。それは来世への信仰です。イスラーム教徒は人の生が現世だけのものではなく、死後に来世が存在することを心から信じています。したがって現世で何かを失うことが、来世でも失うことを意味していません。逆に、現世で困難や災難に苦しむ人は、それに耐えれば来世で大きな報奨を得ることができるのです。

先に述べたように、イスラーム教徒は人生の日々のなかで最もよく起きる事態の一

つが試練であることを知っています。時にこの試練は、人に良い結果をもたらして終わることもあれば、時に災難によって試されることもあると信じています。したがって直面する困難を耐え忍ぶことが最大の徳であることを心から信じています。アッラーが物質的、精神的な災いを人を愛でられ、いつも彼らと共におられるということ、忍耐の後に良い知らせがもたらされるということなどを心の支えとしているのです（雌牛章第 153・155 節）。

Q11 イスラームの教えで「魔術」は認められているのでしょうか

A　アラビア語で「シヒル」という言葉で表現される魔術は、自然の法則と相いれない結果をもたらし人を誤らせる詐術につけられた名称です。クルアーンではさまざまな箇所で魔術について言及し、まじない師や魔術師が嘘つきであることが示されています（高壁章第 116 節、ユーヌス章第 76 － 77 節、ター・ハー章第 69 節、金の装飾章第 30 節、撒き散らすもの章第 52 節）。ハディース（言行録）でも、魔術を行うことは七つの大きな罪の一つと見なされています（ブハーリー、ワサーヤー 23）。魔術は根本的に利益を上げようとする商業行為であるゆえに、宗教やそれが価値を置くものと相いれないものです。魔術にはアッラーの意志や力を超えて何かを行うことができるという考え方が含まれています。しかしアッラーが望むもの以外、どのような魔術であれ、誰にも何の害も及ぼすことができないことがクルアーンには記されています。「だがかれら（悪魔）とて、アッラーの御許しがない限り、それで誰も害することは出来なかった」（雌牛章第 102 節）

イスラームはどのような目的であれ、魔術を行うことや、行わせることを大きな罪と見なし強く反対しています。イスラーム学者たちも、イスラーム教徒が魔術を行ったり行わせたりすることはハラーム（禁止されていること）であると述べています。

Q12 モスクにはなぜ一枚の写真も絵も飾られていないのでしょうか

絵を描くことについては、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）から伝えられた一連のハディースがあります。その中の一つの伝承によれば、あるとき妻のアーイシャは生き物の絵が描かれたクッションを買い

求めました。それをご覧になった預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は家の扉の前に立ち、彼女を中に入れられませんでした。アーイシャは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の顔に満足されていないしるしを見いだし、「アッラーの使徒よ、アッラーと使徒に許しを求めます。私は何か過ちを犯したでしょうか」と尋ねました。すると預言者は、絵の描かれたクッションを示され、「このクッションはなぜここにあるのか」と言われました。アーイシャは、「座ったり、もたれたりできるようにと、あなたのために求めました」と答えました。それに対し預言者は「この絵を描いた人には審判の日に罰が与えられるであろう。そして彼らに『これらの絵に生命を与えてみなさい』と言われる。生き物の絵がある家に天使は入らない」と言われました（ブハーリー、リバース 95）。また別の伝承によると、イブン・アッバースをある画家が訪ねてきて、「私はこの絵を描いて生計を立ててきました。そのことがいいことか悪いことか教えてもらいたい」と言いました。イブン・アッバースは、「預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、『画家は地獄にいる。アッラーは彼が描いた絵に魂を吹き込むまで、彼に罰を与えられる。魂を吹き込むことも不可能である』と言われました」と語ったのです。画家がこの言葉に嘆き悲しむと、イブン・アッバースは続けて「もしあなたが絵を描くことを続けたいのなら、花や木など魂を持たないものを描きなさい」と言いました（ムスリム、リバース 99）。

イスラーム以前の時代のアラブ人たちは偶像を崇拝していました。自らの手で多くの偶像を造り、それを崇拝していたのです。イスラームはタウヒード（神の唯一性）の教えを守るために偶像崇拝につながるものを取り除くことに最大の注意を払ってきたのです。

結論として、現在においてはもはや絵を描くこと、絵に描かれたものを使用することはタウヒードの信条に反する結果をもたらす不安はなくなり、イスラームのさまざまな規範や道徳の原則に反していない限りハラーム（禁止されていること）ではないのです。

しかしモスクはできる限り世俗的なものから遠ざかる空間であり、崇高なるアッラーを崇拝し、その庇護を求める場です。したがって、その妨げとなる対象物や絵をモスクの内部に配置したり壁面に描いたり飾ったりすることは適切なことではありません。

Q13 イスラームではトルコのナザール・ボンジュのような魔除けのお守りを身に着けることは許されていますか

A イスラームは広大な地域に広まりました。そして時がたつうちにイスラーム教徒たちの行いに、その地域の習慣や風習、もしくは土着の宗教が入り混じってきました。イスラームの教えにそぐわないこの種の行いは、一般的にビドゥア（逸脱）と名付けられています。ビドゥアはイスラームの教えの本質には含まれない、イスラーム法において根拠を持たない、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のスンナ（慣行）に反する形で行われる事柄です。

迷信は現実にはそぐわない誤った信条です。アッラーは次のクルアーンの章句でこの種の信条を固く禁じられています。「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう」（食卓章第 90 節）。

今日のイスラーム社会では、残念なことに時どきビドゥアや迷信を目のあたりにすることがあります。例えばトルコの魔除けナザール・ボンジュを身に着けること、神聖な場所に願い事のために布を巻きつけること、墓地でローソクを灯すこと、墓廟に願掛けをすること、歩けない子どもの足にひもを結びつけてモスクの周囲を回ることなどです。ビドゥアや迷信を信じ、行うことはイスラームの教えの本質に反することなのです。

Q14 最近イスラームは怖い、テロといったイメージがあります。イスラームという宗教はテロを容認しているのでしょうか

A テロのよく知られた定義の一つが、「政治的な目的を達成するために、政府や市民、あるいは個人に対して組織的な暴力行為を行うこと」です。イスラームの観点から、テロはどのようなものであれ認められるものではありません。なぜならイスラームでは人の生命、尊厳、信仰、財産は不可侵のものであると教えているからです。テロはその中でも最も価値ある人の命を標的としています。クルアーンでは、「人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである」（食卓章第 32 節）と述べられています。

人類への慈悲として下され、その本質に創造主を知り愛することが含まれている最後に啓示された宗教であるイスラームの教えは、テロや不正に血を流すことなど、社会の安定や信頼を揺るがすどのような行為も認めていません。ただしユダヤ教やキリスト教、あるいはイスラームの歴史において、宗教がテロや暴力行為を正当化するために利用されてきたことは、しばしば見受けられることです。特に 20 世紀の最後の 4 半世紀では、世界中で宗教的な熱狂が高まる風潮が見られ、宗教的行為が社会状況に直面する中で、宗教的な意味づけを持ったテロや暴力が急増していることがわかります。

アッラーは全ての人に自由な意志を与えられました。その意志によって行ったことに対して人は審判を受けるのです。そして人は何らかの過失を犯すものです。イスラーム教徒であってもまったく罪を犯していない人はいません。例えば他の教えを信じている人々の中にもそういう人がいるのと同様に、イスラーム教徒の中にもアルコール飲料を飲み、盗みを働き、利子を受け取り、うそをつき、詐欺を働く人々がいます。しかしその罪はイスラームに帰せられるものではありません。その責任はあくまでその人に帰せられるものなのです。他の教えを信じる人々の中にもテロ活動を行う人がいるように、イスラーム教徒の中にもテロ活動を行う人々がいるかもしれません。しかし真のイスラーム教徒は、そうした人たちの行為を認めることは絶対にありません。イスラームの教えに誠実なイスラーム教徒はイスラームのイメージを損なった彼らに対し、はっきりと対立した姿勢を取るものです。

また何がテロなのか、明確にしなければなりません。テロという言葉は強い者によって意図的に使われることがあります。祖国が支配、占領され、生命や財産、尊厳が失われた人々の、その生命や尊厳を守るための努力や闘いをテロと見なすことは正しくありません。今、世界で起きていることやその背景を正しく判断することが必要なのです。

家庭生活について

Q1 私は新しくイスラームに入信しましたが、夫がイスラーム教徒ではありません。離婚しなければいけないのでしょうか

A　イスラームの学者は、クルアーンのいくつかの章句（雌牛章第221節、食卓章第5節）の解釈を根拠として、イスラーム教徒の女性はイスラーム教徒ではない男性と結婚できないと判断しています。ただしこの見解は結婚する前にイスラーム教徒であった女性に対するものです。イスラーム教徒ではないときに結婚し、その後イスラーム教徒となった女性の場合については論議が交わされています。学者の多くは夫がイスラームを認めない場合は婚姻関係が終わりを告げると見なしています。

また別の見解を持つ学者たちもいます。彼らが結婚生活を続けるかどうかは女性の判断にゆだねられるとしています。信仰を守り崇拝行為を行うことができる女性は、夫がイスラームを理解していれば、望めば結婚生活を続けることができます。ウマルとアリーの時代に同様の出来事が起きたとき、二人のカリフは結婚生活を続けるかどうかを判断するのは女性であるという見解を支持しています（アブドゥルラッザーク、アルームサンナフ6－84）。

Q2 イスラームの性的交渉に関する命令や禁止事項にはどのようなものがあるのでしょうか

イスラームの教えは、人の精神が求めるものだけではなく肉体が求めるものについても、一方に片寄ることなく両者がバランス良く満たされるべきであるとの原則を説いています。

イスラームでは姦淫や同性愛は道徳に反する行いとして、それを禁止しています（夜の旅章第32節）。また一方で動物と性的交渉を持つことは重い罪、すなわち犯罪と見なしています（アブー・ダーウード、フドゥード30、ティルミズィー、フドゥード23）。手を用いて性的快感を得ることも適切な行為とされていません。

Q3 イスラームでは夫が妻を裁判所の手続きを経なくても、口頭で離婚を通告できると聞いたのですが本当でしょうか

A　イスラーム法において、本来、離婚を通告できるのは男性の権限です。しかし夫はこの権限を妻に譲渡することができます。それは婚姻のときに妻に与えることもできるし、その後に与えることもできます。この権限を持つ女性は、与えられた権限に従い望むときに婚姻関係の解消を通告することができます。夫は一度この権限を妻に与えると取り戻すことはできません。ただし自らの離婚を通告する権限は保持しています。

同時にイスラームは、離婚は気まぐれで行うものではなく、良心や道徳が関わる行為としています。ハディース（言行録）では、離婚はアッラーがハラール（許されていること）とされたもののうち、最も好まれないものであると述べられています（アブー・ダーウード、タラーク3）。またイスラームは離婚後の双方の権利や責任も明らかにしています。男性が離婚の権限を気の向くままに用いることを認めず、女性の権利を保護することに、多くの場合において十分な保証を与えてきました。クルアーンでは離婚には証人を立ち会わせねばならないことが助言され（離婚章第2節）、男性が衝動的、かつ不正に離婚を通告することに歯止めをかけています。実際伝統的なイスラーム社会の離婚率が驚くほど低いことは、離婚の権限が乱用されていないことをよく示しています。

結論として、女性が離婚を通告する権限を持った場合には夫婦のどちらからでも、婚姻関係を望むときに終了させることができます。

イスラーム教徒の女性が離婚を望んでいるにもかかわらず、男性が認めない場合にはどうすればいいのでしょうか

A　イスラームは、一度築かれた家庭はできる限り存続させることを強く勧め、いたずらに離婚をすることをよしとしていません。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「アッラーの御許で、ハラール（許されていること）のうち最も好まれないものは離婚である」（アブー・ダーウード、タラーク 3）と仰せられています。夫婦が婚姻関係を双方の合意により終了させることは認められています。このような離婚の申し出は主に女性からもたらされます。なぜならイスラーム法において、宗教的、道徳的な制約を考慮せず、ただ法的な解釈だけから見るなら、夫は自らの意志で妻と離婚する権限を持っています。女性が離婚を求めた場合には、裁判もしくは男性の同意によりそれは認められます。

一方で婚姻の際、女性が自らも離婚する権限を持つことを条件とすれば、男性と同様に望むときに夫と離婚することができます。このような離婚においては原則として男性が異議を唱えることはできません。

イスラームでは女性との結婚が４人まで認められているそうですが、それは女性をおとしめるものではないでしょうか

A　イスラーム以前のアラビア半島では、制限なく数多くの女性との結婚が行われていました。それに対しクルアーンではいくつかの変更が命じられています。婦人章の第３節でアッラーは「あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたが良いと思う２人、３人または４人の女を娶れ。だが公平にしてやれそうにもないならば、只１人だけ（娶るか）、またはあなたがたの右手が所有する者（奴隷の女）で我慢しておきなさい。このことは不公正を避けるため、もっとも公正である」と仰せられています。この章句により、以前は無制限であった婚姻が公正に振る舞うことを条件として４人と制限されたのです。この章句はさらに複数の女性との結婚を、実際には行うことが難しい「公正に振る舞う」という条件をつけることによって、1人の女性との結婚を奨励しているのです。したがって重婚はイスラームが命じていることではなく、逆にやむを得ない状況下で公正という条件をつけて許可を与えているのです。

妻がいる状態で別の女性と結婚することは、一般的に後から結婚する女性にとっては問題とはなりません。なぜなら彼女はその状態を知った上で結婚するからです。重婚は最初に結婚した女性の立場から問題となりやすくなります。しかしイスラーム法の原則によるなら、結婚する相手の男性が将来重婚することを望まない女性は、自分の結婚の際に、重婚に対し自分の許しを得ることを条件とし、予防策をとることができます。さらに何らかの処置を結婚の条件として加えることもできます。結論としてイスラームは１人の女性とのみ結婚することを奨励しているのです。

イスラームでは７世紀において女性の遺産相続を認めていることは画期的なことだと思いますが、男性の半分しか受け取れないのは不公平ではないでしょうか

A　イスラームの遺産法は、イスラーム法の全体や、この法律に則って送られる社会生活の全体を評価するならば、非常に首尾一貫しています。なぜならこの法制度では人が遺産から得る取り分と、家庭における責任との間にある均衡が見られるからです。家族の生計を維持する責任は基本的に男性に負わせられるものであるため、男性には女性よりも多い遺産の取り分が与えられているのです。したがって、このような制度においてはどちらかに対し不公正であるということはありません。また一方で遺産相続人が他の人のために（例えば男性が妹のために）遺産の権利を一部もしくは全て放棄することについては、それを妨げるものは何もないのです。

政治活動について

Q1 イスラームが完全な教えであるなら、なぜイスラーム諸国には発展途上国が多いのでしょうか

A 国が発展途上にあるか、あるいは発展している理由は、その国の宗教のみに関連付けられることではありません。その原因が国の宗教にのみあるならば、ある宗教を持つ国は歴史を通して常に発展している、もしくは遅れているということになります。神道や仏教という宗教を持つ日本と他の国々の間の発展段階が同じでないのと同様に、それぞれの国も歴史を通して、いつも同じ発展段階にあったわけではないのです。こうしたことはイスラーム社会においても当てはまります。つまり、世界の中で発展度合いが比較される際には、一般的に西洋諸国とイスラーム諸国が比較されます。しかしキリスト教という宗教を持つ西洋諸国も、最初から知識や技術のレベルが高く世界をリードしてきたわけではありません。

西洋諸国の優位がどの時代から始まったかについてはさまざまな見解がありますが、イスラーム諸国は10世紀から15世紀にかけて西洋諸国よりも発展していました。西洋諸国は、17世紀以前には技術的、経済的な優位を手にしてはいませんでした。14世紀にイスラームは、西洋諸国が近代になって発見した、人間の生活にまつわるさまざまな分野（農業、建築土木、経済、社会、医学など）を学問として確立していました。それは単に理論としてだけではなく、イスラーム文明の成果として人々の日々の暮らしの中で活かされていたのです。

イスラームは８世紀以降、地中海からイベリア半島へと広がり、ヨーロッパ人たちも十字軍の遠征に見られるように東地中海沿岸にまで到達し、両者の間に文化的な接触が始まりました。これが西洋諸国が後に多くのイスラーム文明を受け入れていく端緒となったのです。スペインのイスラーム教徒たちは農業から鉱業まで、織物から貴金属まで、音楽から衣装まで多くの分野で地元スペインの人々よりも進んだ文明を持ち、輝かしい日々を送っていたのです。輝かしい暮らしの一つは知識や書物に対する愛着です。そして、イスラーム教徒のスペイン人が持っていた技術や文化遺産は少しずつヨーロッパ人の学徒によって西洋諸国に運ばれていったのです。

その西洋諸国は、のちに起きる二つの重要な出来事により、世界の他の国々を支

配する覇権主義的な国家となっていくのです。その一つは、西洋諸国で技術や文化が革新されたこと、もう一つは金融、商業的な資本を持つブルジョワと呼ばれる新しい階級が生まれたことです。西洋諸国における科学技術の発展（特に軍事技術の発展）は資本主義的な生産の拡大を促し、それに伴い西洋諸国は原材料や市場を求め世界各地で植民地化を進めていきました。１７世紀以降、西洋諸国が進めた植民地化政策は、その後長い間、イスラーム諸国を始めとするアジア、アフリカ諸国の停滞と発展の遅れをもたらすこととなったのです。

現在、西洋諸国の発展の象徴である科学技術は、公害や原発など人類に害を及ぼす負の側面があることはもはや周知の事実です。近代技術が生み出した物質文明によって自然は汚され、環境が破壊されてきています。人々は不安と不安定のなかに生きています。科学と宗教、物質と精神が調和した新たな生き方、社会発展のモデルが模索されています。

Q2 オスマン朝が帝国と呼ばれていたのは、他のイスラーム諸国を占領し搾取していたからでしょうか

A 西洋諸国は帝国と帝国主義という言葉の類似性を根拠に、大きな国を帝国と呼んでいます。事実歴史上、この名を冠するのにふさわしい国々が存在してきました。しかし一般的にイスラーム諸国がこの名称で呼ばれることは適切ではありません。西洋諸国は、オスマン朝について言及する際には「オスマン帝国」と呼びます。しかしオスマン朝は自らを帝国ではなく「崇高なるオスマン国」と呼びならわしていました。

帝国には通常、少数の支配者と、多くの従属させられている人々がいます。政権側の人々、知事や司令官、高級官僚たちは支配階級の出身です。しかしオスマン朝では、宰相や王妃、将軍や大使などの多くはトルコ系の人々ではありませんでした。オスマン朝にはイスラーム教徒ではない大臣や将軍もいました。

帝国と呼ばれる国家では、支配層は支配下にある人々を搾取し、地域の富を独占し奢侈な生活を送っていました。しかしオスマン朝がこのような政治を行っていたと考えることは、歴史的な事実を反映していないものとなります。例えば、オスマン朝はアラビア半島のイエメンへ、コーヒー豆や石油を略奪するために行ったのではありません。そもそも石油は２０世紀になってから発見されており、オスマン朝は一度たりともイエメンの石油を略奪したことはないのです。

それどころかオスマン朝は、イエメンのバブ・エル・マンダブ海峡をおさえ、16

世紀にポルトガル人やイギリス人が紅海に入りマッカやマディーナを占領しないようにと、何千人もの戦死者を出してきたのです。また16世紀の最強の海軍であったポルトガルと戦ったピリ・レイス、サイディ・アリー・レイス、ムラド・レイスといったオスマン朝の船乗りたちは、インドやマレーシア、インドネシアから聖地マッカに巡礼に行くイスラーム教徒たちの道中の安全を守るためにインド洋一帯に進出していたのです。1567年にはマラッカとアチェのスルタンであったアラッディン・カッハールの求めにより、オスマン朝の二隻の船と数百人もの兵士が、その地域のイスラーム教徒たちの戦力を高めるために派遣されています。マレーシアやインドネシアを占領する計画などはなかったのです。

帝国主義による支配は、自国の言語を他の民族に強制します。例えば、フランスの支配下にあったアルジェリア、チュニジアではフランス語が話せない人々は仕事を見つけることがたいへん困難です。かつてのソビエト連邦でもロシア民族以外の民族はロシア語を学ばなければなりませんでした。オスマン朝ではトルコ語を他の民族に押し付けることはありませんでした。クルアーンの言葉であるアラビア語を教育の言語として６００年近く用いてきたのです。トルコ語はアラビア文字で表記されていました。その文字は、アラブ人ではなくトルコ人の書道家によって最も美しい形で描かれるようになったのです。

商道徳について

Q1 イスラームでは利子がなぜ禁じられているのですか

A イスラームは法に準じ秩序正しく行われる商業活動には干渉していません。ただし、誤りや不公正な行為があれば人々に警告し、制限や制約を設けています。利子については、商取引での不公正さを取り除き、市場の独立性を保持するために禁止されています。利子は、資本を持つ富裕層がリスクを取ることなく、何の努力もなしに得られる不公正な利益です。

利子のつく預金に財産を委ねるならば、そこに生産力は高まりません。利子は相互扶助を失わせ、豊かな人が貧しい人を搾取する状況を作り出してしまいます。そして、こうした状況は両者の間の階級的な格差を深め、やがて敵対関係に発展する深刻な社会問題を生み出します。さらに利子は、インフレを引き起こす最も大きな要因の一つです。したがってイスラームでは、明らかに不公正さをもたらし、資本を一定の階級に集中させ、大多数の人々が搾取される要因となる利子を認めていません。また利子を伴う仕事に従事することをも強く拒んでいます。これに対し、労働に勤しみ利益を得ようと努力することを推奨しています。

イスラームが登場した７世紀のアラブ社会では、富が一部の人々に集中する一方、絶え間なく増えていく高利の負債を払えない人々やその子どもたちは奴隷として売買されるようになっていました。つまり、豊かで幸運な少数の人々だけが莫大な利益を得る一方で、大多数の人々はますます貧しくなり困窮していました。そのため、来世と現世における幸福を目的とするイスラームは、明らかに不公正でありながら、広く行われていた利子を禁止したのです。

Q2 イスラームは財産や資本をどのようにとらえているのですか

A イスラームは人々に、現世で財産を手放したり遠ざけることを勧めてもいなければ、財産を唯一の価値として生きる目的とするような生き方も奨励していません。この二つのどちらにも片寄らない中庸の道を進むように奨励しています。事実、信者の人生哲学は、次の祈りの言葉によって表現されています。「主よ、現世でわたしたちに幸いを賜い、また来世でも幸いを賜え。業火の懲罰から、わたしたちを守ってください」（雌牛章第 201 節）。

クルアーンは信者に、「あなたがたの持つものはすべて消滅する。だがアッラーの御許のものは残る。われは耐え忍ぶ者に対し、かれらが行った最も優れた行為によって、報奨を与える」（蜜蜂章第 96 節）と告げています。しかしこのとは、永遠である天国の恵みを得るために、現世の恵みを放棄しなければいけないという意味ではありません。逆にクルアーンは「アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの（務むべき）部分を忘れてはなりません」（物語章第 77 節）と告げています。言い換えるなら、人はこの世界で恵み持ちつつ来世を求め、かつ、現世での生を忘れてはいけないと述べているのです。またクルアーンは、来世での永遠の恵みを忘れた生き方は、遊びや戯れだけの意味のないものであると繰り返し述べています（蜘蛛章第 64 節）。

信者には、「礼拝が終ったなら、あなたがたは方々に散り、アッラーの恩恵を求めて、アッラーを讃えて多く唱念しなさい」（合同礼拝章第 10 節）と奨励しています。これは、崇拝行為と商業活動が併行して行われるべきものであることを示しています。したがってイスラームでは、世俗的なものが人を卑しめるものとして作用するととらえていません。逆に財産は、アッラーの定められた範囲内で使われる場合には人を高めるものとされています。実際クルアーンでしばしば喜捨を行う人の徳を指摘していることは、これを示すものです（創造者章第 29 節）。

イスラームでは財産、地位、子どもなど所有するものは全て試練の対象となります（騙し合い章第 15 節、偽信者たち章第 9 節）。この意味で豊かである人はその豊かさにおいて、貧しい人はその貧しさにおいて試練を受けます。人は資産をどこで、何に費やしたかという点について責任を負います。なぜなら富や財産の真の持主は崇高なるアッラーだからです。富や財産は、アッラーから人に信託として与えられているのです。貧しい人は、貧しさを克服するために努力したか否か、困難を耐えたか否か、崇高なるアッラーに対して悪い考えを持ったかどうかという点で試練を受けます。

被造物の世界に存在する全てのものと同様、財産や資本も人の生活を助け、幸福にする要因の一つに過ぎません。労働に勤しみ生計を立てることは、誠実な信者の最も重要な務めの一つです。事実イスラームでは、詐欺、窃盗、汚職、利子は絶対的なハラーム（禁止されていること）とされています（食卓章第 38 節、詩人たち章第 181 − 183 節、夜の旅章第 35 節、フード章第 85 節、量を減らす者章第 1 − 3 節、婦人章第 29 − 30 節、ビザンチン章第 39 節、雌牛章第 275・276・278 節、イムラーン家章第 130 節）。

イスラームでは年に一度、財産の 40 分の 1 をザカート（喜捨）として貧しい人々などに施すことがファルド（義務）とされています。クルアーンによると、私たちが所有しているお金や財産には、貧しい人々や困窮している人々も権利を持っています（階段章第 24 − 25 節）。

イスラームは、そうした人々に対する援助は、見返りを求めず、ただアッラーのご満悦のために実行することを命じ、奨励しています。したがってアッラーのご満悦のためになされる家計への援助、寄付、そして各種の経済援助は、ある意味で人が天国へ迎え入れられる要因となります（悔悟章第 111 節）。

経済学者たちは、より豊かな暮らしを実現するためにお金を経済活動で循環させるよう奨励しています。クルアーンも、お金をアッラーのために援助として用いず、非生産的な資本として蓄え隠す人々に警告しています（悔悟章第 34 − 35 節）。

社会生活について

Q1 イスラーム教徒になっても、仏教徒である近親者の葬儀に参列できますか。できるのであれば、葬儀の間はどのように振る舞えばいいのでしょうか

A　イスラーム教徒になったからといって、社会や親戚、家族と距離を置く必要はありません。イスラーム教徒かどうかに関係なく、隣人に対し果たすべき責務があります。子供の誕生や結婚などでは喜びを分かち合い、災難にあったときは救いの手を差しのべるなど、良き隣人として人間的な関係を維持しなければなりません。したがって近親者の葬儀に参列することに問題はありません。そのときには、故人を偲んだり、適切な言葉でお悔やみを述べることも可能です。

Q2 人間関係を正すためのイスラームの規定とはどのようなものですか

A　人間関係については、イスラームの道徳観では相手の人格や尊厳を傷つけないことが原則です。また、個人的な利益ではなく社会全体の利益を重視し、より良い言葉や行動、態度を選ぶことも根本的な原則の一つです。

人と接する上で何に注意すべきかは、クルアーンや預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のスンナ（慣行）において明らかにされています。その一つとして次のことが挙げられています。

「信仰する者よ、ある者たちに外の者たちを嘲笑させてはならない。嘲笑された方が優れているかも知れない。女たちも外の女たちを嘲笑させてはならない。嘲笑された女たちが優れているかも知れない。そして互いに中傷してはならない。また綽名で罵り合ってはならない。信仰に入った後は、悪を暗示するような呼名を口にしてはならない。止めない者は不義の徒である。信仰する者よ、邪推の多くを祓え。邪推はときには罪である。無用の詮索をしたり互いに陰口をたたいてはならない」（部屋章第

11 − 12 節）。

また、人は話しすぎたり、他の人が話しているのを妨げたりしてはいけません。3人で話しているときに、もう1人に疑念を抱かせるような話をすることも避けるようにしなければなりません。また話すときには、相手が聞き返さなければいけないほど声が小さくてもいけないし、聞き手を不快にするほど声が大きくてもいけません。教えへの憎悪や、醜く粗野な言葉は絶対に口にしてはなりません。聞き手を卑しめたり、思い上がった態度を取ることも大きな誤りです。あくびをしそうなときには、口を手で覆わなければなりません。

他の人の家を訪問したときは、ドアが開かれたときに家の中が見えないように、ドアの端に立っていなければいけません。もしドアを3度ノックしても返事がなければ、それ以上しつこくノックせず引き返さなければなりません。家の中に招かれた場合は、「ビスミッラー（アッラーの御名によって）」と唱えながら右足から入り、家にいる人々に挨拶しなければなりません。

物を売買するときや、借金を支払うときには、相手に敬意を払わなければなりません。物事は難しくするのではなく、容易にするようにしなければなりません。イスラーム教徒は人に会えば挨拶をしなければなりません。目下の者が目上の者に、少数の方は大人数の方に、乗り物に乗っている人は歩いている人に、歩いている人は座っている人に挨拶をするのが礼儀に適っています。

人は自分に親切にしてくれた人には、可能な限り同様の親切心で応じなければなりません。それができない場合には、その人のことを思いドゥアー（祈願）し、感謝しなければなりません。感謝することを知らない人は、アッラーにも感謝しなかったことになります。また人に腹を立てることがあったとしても、その人と3日以上不仲な状態を続けてはいけません。

Q3 イスラームにおける隣人や親戚との付き合い方を教えてください

A　社会的な相互扶助の観点からすると隣人は家族に次いで重要な存在です。クルアーンやハディース（言行録）では、隣人との関係について詳細に述べられています。クルアーンのある章句では、両親や近親者に次いで隣人に善行を施し、良い態度で接することが奨励されています（婦人章第36節）。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は次のように、隣人への行いについてご自身になされた天使の奨励に言及し、隣人の大切さを強調されています。「ジブラー

イール（啓示を運んできた天使）は、私に隣人について非常に多くの奨励を行ったため、このままいけば隣人を遺産相続人にするのではないかと思ったほどだった」（ブハーリー、アーダーブ 123）

「隣人の言動について安心できないでいる人は、真のイスラーム教徒ではない」（ブハーリー、アーダーブ 29）という預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉は、隣人との関係の重要性と同時に、それがいかに繊細な問題であるかを明白に示しています。アッラーの使徒の「アッラーと来世を信じる人は、隣人をもてなしなさい」（ブハーリー、アーダーブ 31）という言葉も注目に値します。

アッラーの使徒は隣人との付き合いをどのようにすべきかについて、次のことを挙げられています。1. 病気になったときにはお見舞いに行く。2. 亡くなったときには遺体の搬出などを手伝う。3. 借金を申し込まれれば貸す。4. 隣人が困難な状況に陥っている場合には援助する。5. 何らかの恵みを得た場合は祝福する。6. 災難に見舞われた場合には慰める。7. 隣人の家の風通し、日当たり、景色を妨げるほど自分の家を高くしない。8. 何を料理しているかを隣人に知らせない、知らせた場合には隣人にも料理を分ける（マジュマーウーッザヴァイド、8、168 – 170）。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のこれら奨励は、隣人への対応を全て示したものではなく、重要な例として列挙したものです。したがってイスラーム教徒は、隣人たちと良好な関係を保ち、イスラームの相互扶助、他の人に迷惑をかけないといった原則に従って行動し、良き習慣や伝統を忘れないことが必要です。

一般的にイスラーム教徒たち、特に隣人同士の間で行われるもてなし、助け合い、訪問、寛容、よき日も悪い日をも分かち合う、招待に応える、病人を見舞う、祝日を祝う、祝福しあう、お悔みを述べるといった社会的・道徳的な事柄は、親戚の間でも必要不可欠なものです。むしろこうしたことは全て、まず親戚とのつながりを保つ上で必要とされるもので、ハディース（言行録）や道徳の書ではこれらの事柄について特別な重要性が与えられています。

あるハディースでは、アッラーは誰であれ親戚と緊密な付き合いをするのであれば、アッラーご自身もそのしもべとのつながりを保たれ、誰であれ親戚との結びつきを絶つのであれば、アッラーもそのしもべとのつながりを絶たれることが明らかにされています（ブハーリー、アーダーブ 13）。このことに関し他のハディースでは、「あらゆる徳のうち最も優れた者は、あなたへの訪問を絶った親戚を訪問し、付き合いを再開することである」（イブン・ハンバル、ムスナド、3、438）と述べられています。別のハディースでは、訪問し合うことが糧を豊かにし（ブハーリー、アーダーブ 12、ムスリム、ビッル 20、21）、親戚に経済的に援助することが他者に援助する 2 倍の報奨を得させるものであること（ナサーイ、ザカート 82、ティルミズィー、ザカート

26）が明らかにされています。さらにあるハディースでは、親戚付き合いを絶った人は天国に入れないと語られています（ブハーリー、アーダーブ 11、ムスリム、ビッル 18、19）。

Q4 私がイスラーム教徒になった場合、周囲の人々が敏感に反応すると思います。例えば友達と一緒にレストランに行っても、皆と同じものを食べたりお酒を飲むこともできなくなり、仲間外れにされるのではないかと心配しています

A イスラーム教徒になることは明確な意志による選択で、あなたは新しい生き方と世界観を得ることになります。そのため、周囲の人々が今までにない反応を示すのは当然です。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代以来、イスラーム教徒になったことでさまざまな反応が起き、中にはイスラームを信仰する人に対し拷問を加えるようなことまでありました。例えば、ビラール、ハバーブ、スハイブ、アンマールを始めとして多くの教友が拷問を受けています。しかし、その反応が肉体的なものであれ精神的なものであれ、あらゆる反応に対する忍耐は大きな報奨として私たちに戻ってくるでしょう。したがって、できる限り耐え忍ぶことが必要です。同時に、イスラーム教徒になったからといって、家族や隣人、親戚との結びつきを決して断ってはいけません。それどころか常に彼らとかかわり、良い模範を示す人となるべく努力を続けなければなりません。

イスラーム教徒として新たな生活を始めた後は、イスラームの命令や禁止事項を少しずつ実行するよう努力しなければなりません。信仰の喜びを感じたときには、直面する苦しみがあなたに力を与え、イスラーム教徒としての決意を強固にするでしょう。イスラーム教徒たちと知り合うたびに、さまざまなことがより容易になっていくでしょう。イスラーム教徒同士が互いを兄弟と見なし、あなたは新しい仲間を得ることができるでしょう。なぜならクルアーンは、全てのイスラーム教徒が兄弟であると宣言しているからです。あなたもイスラーム教徒たちとは兄弟であると強く意識してください。

Q5 デンマークで起こった風刺絵事件や「イスラーム教徒たちの無罪」という映画に対するイスラーム教徒の反応は、過剰ではないでしょうか。風刺絵を発表したり映画を製作する自由は誰にでも認められる権利ではないでしょうか

A イスラーム教徒は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）だけではなく、キリスト教の預言者であるイーサーや、ユダヤ教の預言者であるムーサー、さらにアッラーが他の民に遣わされた他の預言者たちをも預言者として認識し、彼らへの非礼な態度を容認していません。またクルアーンを正しいと認めない教えを内包する宗教に対してさえ、礼を失した態度を取ることは認めていません（家畜章第108節）。したがって、他の宗教にに対する不敬な態度をよしとしないイスラーム教徒が、自らにとって神聖なものを守ろうと努力することは自然な行いであり、時として宗教的な責任ともなり得ます。

イスラーム教徒の大多数は、イスラームへの反対派が風刺絵や文章、映画によって、表現の自由を隠れ蓑に意識的にイスラームへの恐怖心をあおろうとしていると見ています。それに対してはイスラーム教徒は法に従い、理性を逸脱しない抗議活動を行うことが重要です。

風刺絵の作者や映画の製作者、あるいは同様な行為の実行者は、イスラーム教徒が過激な反応を示すことを期待して、そのような手段を取ったと思われます。彼らはイスラーム教徒が過激な反応を示せば、その後にイスラーム教徒は寛容性がなく攻撃的で暴力的であるというレッテルを貼るでしょう。だからこそ、そのような事態に対しては、暴力に訴えず抗議することが肝要です。

Q6 イスラームを深く学ぶためには、どのような方法が勧められますか。例えば、イスラーム教徒である日本人によるイスラームに関する著作は非常に少なく、イスラーム教徒ではない日本人によって書かれた書物には誤りがあったり主観的であったりします

A イスラームの教えは急速に広まっていますが、残念なことに世界各地で、正確な宗教知識に裏打ちされた文献を見つけることは不可能に近いのが現状です。あなたが懸念するように、イスラームに関する日本語による著作はまだ多くはありません。そのため、書物によって知識を得るのに限界があるのは当然です。したがって可能であれば外国の文献を通して知識を習得し、それができなければイスラーム教徒との結びつきを深めることをお勧めします。同時に、多くの日本人が行っているように、イスラーム諸国を旅し、イスラーム社会を自分の目で見ることをお勧めします。

Q7 なぜイスラームは西洋に影響を与えるほどの文明を作り上げることができたのでしょうか

A クルアーンによってイスラーム文明は「書物」と「知」の文明となりました。なぜならクルアーンは、理性や常識に訴え、考えずに信じることを勧めるような教義を含んでいません。クルアーンには理解し、考えることを呼びかける章句が多くあります。そこでは真実に至るために、邪推によって行動しないこと（ユーヌス章第36節）、模倣によって道を逸脱しないこと（雌牛章第170節）、明確な知識や証拠に依ること（雌牛章第111節）が根本的な原則とされています。

また預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、知識を求めることはイスラーム教徒にとって義務であると語っておられます。例えば、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「アッラーはどのような病気も治療法と一緒でなければ創造されていない」ことから、まだ発見されていない薬や治療方法を研究しなければならいないと認識していました。この考えによって医学研究が進められ発展していきました。キリスト教徒の西洋で伝染病は神が下した罰と見なされていた時代に、イスラーム教徒は病気

が発生した地域を隔離しそれを根絶するために闘っていたのです。

クルアーンは、創造主の偉大さを示す論拠として、星やその動きに見られる天体の調和を挙げています（大権章第３節）。また、地と天の創造について熟考するようイスラーム教徒に呼びかけています（イムラーン家章第 191 節）。これらに触発されたイスラーム教徒たちは、天文学や数学の研究に邁進し始めました。地球は自転し、惑星が太陽の周囲を回っているという地動説は、西洋では教会が無慈悲な弾劾を加えたために 16 世紀になってからようやく広まり始めました。しかしイスラーム教徒の学者たちは地動説を早くも 9、10 世紀ごろに唱え始め、地球は丸く自転しているという結論に達していました。さらに、彼らは緯度と経度の計算まで行っていたのです。

西洋で女性に魂があるかどうかが議論されているときでさえ、イスラームでは女性と男性を区別せず、全ての人間は平等であると認め、生命、財産、尊厳は不可侵であると宣言していました。さらに、キリスト教の西洋で入浴が贅沢であった時代に、イスラーム諸国では清潔さは信仰の要と見なされ、貧しい家にすら水浴びのできる場があり、町のほとんどの地域には公衆浴場が造られていました。

このような現実を目の当たりにした当時のスペインの人々は、アッラーが人間を地上における代理者と宣言されているイスラームの教えを躊躇なく受け入れました。アンダルシアのイスラーム教徒のおかげでイスラーム文明と出会った西洋諸国は、この文明の普遍的な要素を多く取り入れたのです。

道徳について

イスラーム教徒になってから家族が私を遠ざけるようになりました。家族に対して私はどのように接していけばいいのでしょうか

A

クルアーンやハディース（言行録）では、アッラーのしもべの義務として、両親を敬い、親切に振る舞うことが義務であると指摘されています（家畜章第 151 − 153 節、夜の旅章第 22 − 23 節）。

預言者イブラーヒームと父親アザルとの会話を紹介するクルアーンのマルヤム章第 41 − 50 節には、両親に対して敬意を払わねばならないことについて注目すべき一文があります。ここで預言者イブラーヒームは、父親アザルに対する言葉の最初に逐一「父よ」と呼びかけています。父親は偶像崇拝者であり、荒くれ男で常に人を威嚇するような言葉を使っていたにもかかわらず、預言者イブラーヒーは父親に対して敬意を表す姿勢を崩さず、「あなたに平安あれ。わたしの主に、あなたのために御赦しを願います」と語りかけています。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、アッラーの御許において最も大切な行いは、「時間通りに行われる礼拝、両親への善行、そしてアッラーの道におけるジハード」（ムスリム、イーマーン 137）だと言われています。またあるハディースでは、「アッラーに何ものかを配すること、両親に悪態をつくこと、うその証言をすること」は大きな罪とされています（ブハーリー、アーダーブ 1、ムスリム、イーマーン 143,144）。

また次の伝承は、子の親に対する態度について重要な示唆を与えています。「アスマ・ビントゥ・アブー・バクルは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に偶像崇拝者の母と会うべきかどうか尋ねました。アッラーの使徒は、母と会い敬意を払うべきであると話されました」（ブハーリー、ヒバ 28）。

あなたが父祖伝来の宗教からイスラーム教徒に改宗したことに対して両親を始めとする親族は心良く思っていず、あなたに心理的な圧力をかけてイスラームから遠ざけようとしているのかもしれません。しかしあなたが行うべきことは、彼らとの関係を絶つことではなく、逆に生計を担うなど積極的に家族を助けることです。なぜならアッラーの命令は非常にはっきりしているからです。「われは人間に、両親に対して

親切にするよう命じた。だがもしかれら（両親）が、あなたに対し何だか分らないものをわれに配するように強いるならば、かれらにしたがってはならない。あなたがたは（皆）われの許に帰る。そのときわれは、あなたがたの行ったことを告げるであろう」（蜘蛛章第８節）。

今のあなたがなすべきことは、家族があなたに示したさまざまな否定的な態度や振る舞いに辛抱強く耐え、アッラーの助けを求め、彼らもイスラームの教えに導かれるように常にドゥアー（祈願）し懇願することです。

Q2 イスラームは障害者に対してどのように対応していますか

A イスラームの学者は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にならって障害者を身体的障害と精神的障害の二つに区分しています。身体的障害としてまず視覚障害が挙げられます。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のハディース（言行録）には、視覚障害を持つ人に対する言葉が多く含まれています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、目が不自由でありながらも忍耐強い人々は間違いなく天国へ行く報奨が与えられることを明らかにされています。そして目が不自由な人に対し悪辣な態度を取る人を非難されています。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、目が不自由であった著名な教友イブン・ウンミ・マクトゥームをモスクのムアッズィン（礼拝の時を告げるアザーンを読み上げる人）に任命されていました。さらに彼を公務の最も高い位に就けて何度もご自身の代理、すなわち国家の長の代理として重用しておられました。

精神的障害を持つ人々には宗教上の責務を免除されています。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は次のように語られています。「三つの状態にある人々は、宗教上の責務を免除される。思春期に達していない子供、目が覚めるまで眠っている人々、そして精神を病んでいる人である」（ブハーリー、フドゥード 22）。

イスラーム Q＆A

2014 年 1 月 1 日　第一刷発行

発行者　宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ　©2014
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

〒151-0065
東京都渋谷区大山町 1-19
電話（03）5790-0760
FAX（03）5790-7822
http://tokyocamii.org
info@tokyocamii.org